

長岡京市埋蔵文化財調査報告書

第25集

2002

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序 文

本市には、原始・古代から現在までの連綿と続いてきた歴史の軌跡が、大地に刻まれています。市内にあって、神足、今里、開田などの各地域では、それぞれに原始からの歴史を辿ることができます。神足地域では、旧石器時代から現在の息づく町までの変遷を知ることができます。特に、弥生時代の大規模集落、古墳時代の古墳に葬られなかつた人たちの墓地、長岡京跡の28棟以上の整然と並んだ建物群のある宅地、西国街道や勝龍寺を媒介として開けた平安・中世の集落、また永井直清による江戸時代勝龍寺城築城、神足駅を中心に発展した工場地帯と集落の変革など、独特のあゆみが見られます。そして今、この地域で再開発に伴う調査が始まり、さらに大きく変貌しようとしています。

本書には、長岡京駅西口地区市街地再開発に伴い、神足地域で実施した3件の発掘調査成果を掲載しています。今回の発掘調査では、弥生時代の溝、長岡京期の建物跡、中世から近代の井戸や溝などが見つかりました。出土遺物には、墨書土器や青銅製仏像など、貴重なものも含まれていました。

本書が、分野を問わず、広く活用されれば幸いです。最後に、調査から報告書作成に至るまで、ご理解・ご協力いただいた関係者・各機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成14年5月

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
理事長 芦 田 富 男

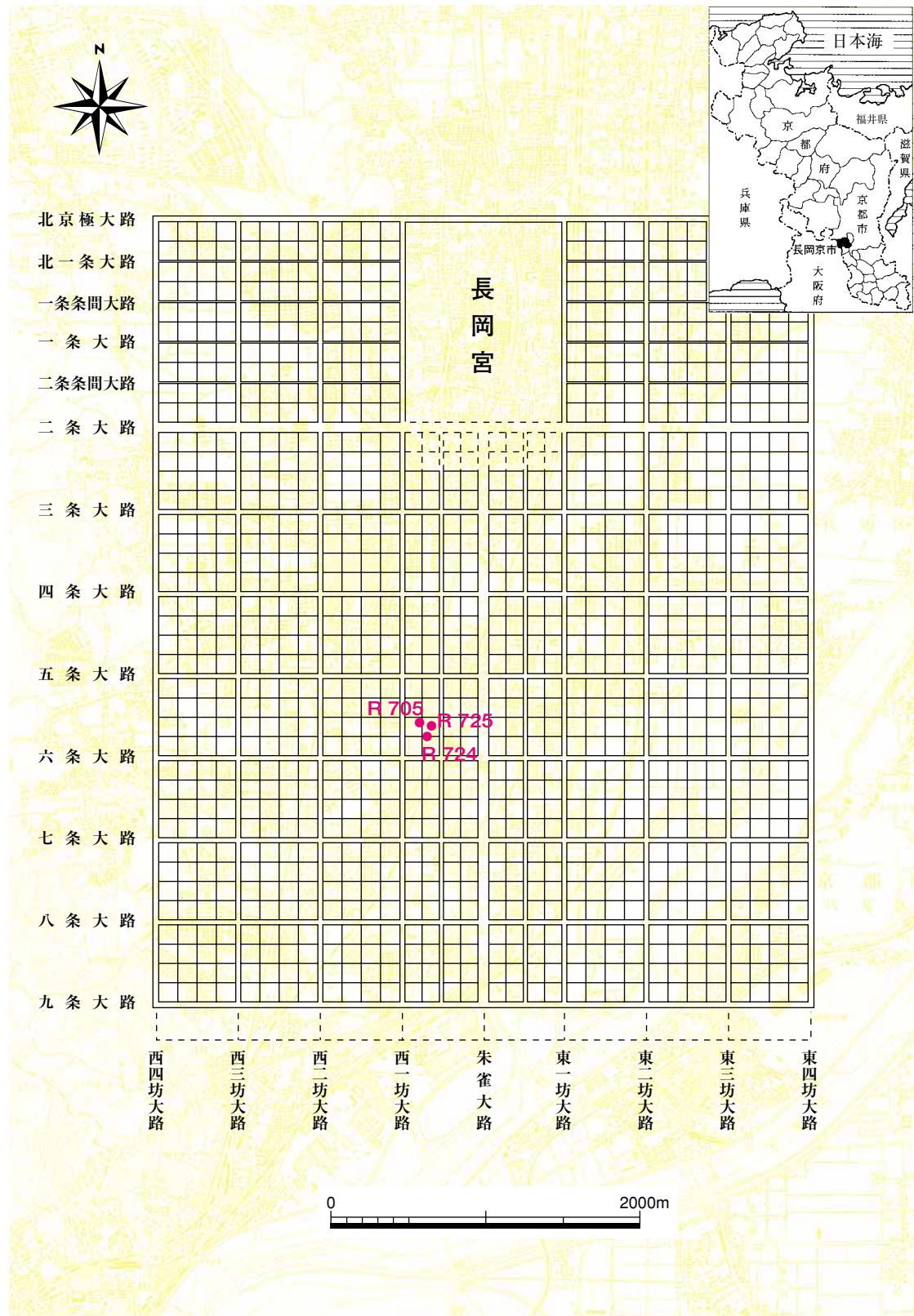
凡　　例

1. 本書は、平成13年度の長岡京駅西口地区第一種市街地再開発事業施設建築敷地埋蔵文化財発掘調査委託とともに神足二丁目地内3カ所での発掘調査成果の概要報告である。それぞれの所在地・調査期間・調査面積は、付表-1に示した。地区名には、長岡京駅西口地区市街地再開発組合の「全画地指摘図」記載地区名を記した。
2. 現地調査は、「全画地指摘図」記載地区名（以下同じ）のC-5地区〔調査名（以下同じ）長岡京跡右京第705次（7ANMDB-4地区）調査〕を岩崎 誠が、C-12地区〔長岡京跡右京第724次（7ANMDB-5地区）調査〕を木村泰彦が、C-15地区〔長岡京跡右京第725次（7ANMDB-6地区）調査〕を中島皆夫が担当した。
3. 長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良国立文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
4. 長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号の復原に従った。
5. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
6. 本書挿図の土層名で（ ）を付けて示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のJIS表記法による土色である。
7. 遺物写真は、西大寺フォト 杉本和樹氏に撮影を依頼した。
8. 本書の執筆はC-5地区（右京第705次調査）を岩崎、C-12地区（右京第724次調査）を木村、C-15地区（右京第725次調査）を中島が担当し、本書の編集は、この3名で行った。

*表紙 右京第705次調査出土青銅製仏像

付表-1 本書掲載調査地一覧表

地区名	調査次数	所 在 地	調 査 期 間	調査面積
C-5	右京第705次	神足二丁目地内	2001年12月10日～2002年1月22日	209
C-12	右京第724次	神足二丁目地内	2001年11月12日～2001年12月4日	107
C-15	右京第725次	神足二丁目地内	2001年11月19日～2001年12月17日	96



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本 文 目 次

序 文	i
凡 例	ii
はじめに	1
第 1 章 長岡京跡右京第705次（7 A N M D B – 4 地区）調査概要.....	2
長岡京駅西口地区市街地再開発事業に伴うC – 5 地区の調査	
1 調査経過	2
2 検出遺構	3
3 出土遺物	9
4 まとめ	13
第 2 章 長岡京跡右京第724次（7 A N M D B – 5 地区）調査概要.....	14
長岡京駅西口地区市街地再開発事業に伴うC – 12地区の調査	
1 調査経過	14
2 検出遺構	16
3 出土遺物	18
4 まとめ	20
第 3 章 長岡京跡右京第725次（7 A N M D B – 6 地区）調査概要.....	22
長岡京駅西口地区市街地再開発事業に伴うC – 15地区の調査	
1 調査経過	22
2 検出遺構	22
3 出土遺物	26
4 まとめ	28

図版目次

長岡京跡右京第705・724・725次調査

- 図版 1 (1) 調査地周辺航空写真（1987年4月 南から）
 (2) 調査地周辺航空写真（1999年12月 西から）

長岡京跡右京第705次調査

- 図版 2 完掘状況全景（南東から）
 図版 3 (1) 近世以後の遺構全景（西から）
 (2) 完掘状況全景（南西から）
 図版 4 (1) 溝S D13（南西から）
 (2) 溝S D13（2C区）礫出土状況（南西から）
 図版 5 (1) 溝S D13（C2区）A・B区分岐部遺物出土状況（北西から）
 (2) 溝S D13北部（1B区）遺物出土状況（北東から）
 図版 6 (1) 溝S D13北部（1B区）土師器皿集積状況（南東から）
 (2) 土坑S K52断面（西から）
 (3) 土坑S K52礫出土状況（西から）
 (4) 土坑S K54瓦器椀出土状況（西から）
 (5) 土坑S K54断面（西から）
 図版 7 (1) 井戸S E45出土青銅製仏像
 (2) 溝S D13出土一括遺物
 図版 8 (1) 土坑S K54出土一括遺物
 (2) フイゴと鋳型
 (3) 上・石製品、下・硯
 図版 9 (1) 上・丸瓦、下・石臼と階段状石製品
 (2) 陶製筒形容器
 (3) 溝S D13出土鉄製品
 (4) 軒瓦類
 (5) 上・土製品、下・砥石
 図版 10 (1) 土坑S X02出土陶磁器
 (2) 井戸S E10・45・48、土坑S X37出土陶磁器等
 図版 11 (1) 土坑S X02出土墨書磁器
 (2) 土坑S X09・11・40出土磁器
 (3) 土坑S X25出土陶磁器

- 図版 12 (1) 白磁・青磁・緑釉陶器等
 (2) 井戸 S E 45出土鉢・壺類
- 図版 13 (1) 鍋・羽釜類
 (2) 青磁碗、天目茶碗、瓦器碗
- 図版 14 土師器皿・擂鉢他
- 図版 15 土師器皿・弥生土器

長岡京跡右京第724次調査

- 図版 16 (1) 北調査区全景（南から）
 (2) 南調査区全景（北から）
- 図版 17 (1) 掘立柱建物 S B 02（東から）
 (2) 方形周溝墓 S X 03（南西から）
- 図版 18 (1) 方形周溝墓 S X 03（西から）
 (2) 方形周溝墓 S X 04（北東から）
- 図版 19 (1) 出土遺物－1
 (2) 出土遺物－2

長岡京跡右京第725次調査

- 図版 20 (1) 南調査区長岡京期以降の状況（北から）
 (2) 南調査区完掘状況（北西から）
- 図版 21 (1) 北調査区長岡京期以降の状況（南から）
 (2) 北調査区完掘状況（北から）
- 図版 22 (1) 柵 S A 06（北西から）
 (2) 掘立柱建物 S B 09（西から）
 (3) 掘立柱建物 S B 09（北西から）
 (4) 掘立柱建物 S B 09（東から）
 (5) 溝 S D 04（北から）
 (6) 調査地周辺の状況（東から）
- 図版 23 (1) 長岡京期以降の遺物
 (2) 弥生土器壺・甕口縁部
- 図版 24 (1) 弥生土器壺・甕体部、高杯
 (2) 弥生土器壺・甕底部

挿 図 目 次

第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000) iii

長岡京跡右京第705・724・725次調査

第2図 発掘調査地位置図 (1/5000) 1

長岡京跡右京第705次調査

第3図 調査区土層図 (1/100)	4
第4図 検出遺構変遷図 (1/200)	6
第5図 井戸S E45実測図 (1/40)	7
第6図 平安時代から中世にかけての遺構実測図 (1/100)	8
第7図 溝S D13土層図 (1/40)	9
第8図 柱穴P 71実測図 (1/40)	9
第9図 土坑S K54実測図 (1/20)	9
第10図 出土遺物実測図 (1/4)	11
第11図 青銅製仏像実測図 (1/2)	12

長岡京跡右京第724次調査

第12図 北調査区調査風景 (南から)	14
第13図 南調査区調査風景 (北から)	14
第14図 検出遺構図・土層図 (1/100)	15
第15図 掘立柱建物S B02実測図 (1/80)	16
第16図 掘立柱建物S B02 P 1検出状況 (南から)	16
第17図 方形周溝墓S X04北側周溝 (東から)	17
第18図 出土遺物実測図 (1/4)	19

長岡京跡右京第725次調査

第19図 検出遺構図・土層図 (1/100)	23
第20図 柵S A06実測図 (1/80)	24
第21図 井戸S E07実測図 (1/50)	24
第22図 掘立柱建物S B02・09実測図 (1/80)	25
第23図 出土遺物実測図 (1/4)	27
第24図 出土遺物の比率.....	28

第25図	周辺調査地遺構図－江戸時代－（1/1000）	30
第26図	周辺調査地遺構図－鎌倉時代－（1/1000）	31
第27図	周辺調査地遺構図－長岡京期－（1/1000）	32
第28図	周辺調査地遺構図－弥生時代－（1/1000）	33

付 表 目 次

付表－1	本書掲載調査地一覧表	ii
付表－2	柱穴以外遺構出土主な遺物一覧	5
付表－3	柱穴出土主な遺物一覧	10
付表－4	中世遺構出土遺物破片数統計表	13
付表－5	弥生土器壺・甕の破片数	28
付表－6	報告書抄録	34

はじめに

当調査は、長岡京駅西口地区市街地再開発に伴って実施した。所在地は、JR長岡京駅の南西約150m付近で、神足二丁目地内にある。調査地点は、東西約150m、南北約109mの長方形区画をなす旧小字堂ノ森に位置する。当小字の東限はJR東海道本線により、北東～南西方向に変形しているが、本来109m四方の整った形であったと思われる。条里制区画の一坪規模に類似するが、推定条里地割りには該当しない。当小字の西辺は、西国街道で限られる。小字内は道で田の字形に区切られており、その南西部で3カ所の調査を行った。

調査地周辺部は、旧石器時代から近・現代に至るまでの過程が、連綿と語れる貴重な存在といえる。これらの調査地は、旧石器時代から室町時代までの神足遺跡に含まれるとともに、長岡京跡では、右京六条一坊十一町（C-15地区・右京第725次調査）、十二町（C-12地区・右京第724次調査）、十四町（C-5地区・右京第705次調査）の推定地でもある。また江戸時代の勝龍寺城もあり、特徴ある遺跡が重複する地域といえる。また神足地域の近代史では、軍需景気によって、神足駅を媒介に、大きく様変わりした。このように中世以後の地域史は、交通網が重要な役割を果たしたと考えられる。東方に広い沖積平野を望む、安定した低位段丘という立地も、原始・古代からの重要な立地環境となっていたであろう。

今回の3カ所での調査に止まらず、今後の周辺部での調査も含めて、原始・古代の遺跡だけでなく、中世・近世・近代に至るまでを調査の対象とする必要がある。以下に各調査ごとの成果を概要報告する。



第2図 発掘調査地位置図（1/5000）

第1章 長岡京跡右京第705次（7 A N M D B -4地区）調査概要

—右京六条一坊十四町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡—

長岡京駅西口地区市街地再開発事業に伴うC-5地区の調査

1 調査経過

当調査は、2001年12月10日から2002年1月22日まで実施した。調査地は、JR長岡京駅の南西約150mにあり、調査地の西に面して、ほぼ南北方向に西国街道がある。地表面標高は20.9~21mで、東から西にわずかに傾斜する。地形分類では、低位段丘Ⅰにある。

当調査地の北東隣接地では、右京第184次調査が昭和59年度に実施されており、14~15世紀の中世遺構を中心に、弥生時代などの神足遺跡に関する成果が報告されている。^(注1) 南東約60mの工場跡地では、右京第606・630・654次調査⁽²⁾を、平成10~11年度にかけて実施した。それらの調査では、長岡京跡の右京六条一坊十一~十二町にかけての宅地推定地で、整然と並ぶ東西棟の建物群が検出されたほか、縄文時代の土坑・弥生時代の竪穴住居や方形周溝墓群・古墳時代の竪穴住居・平安時代の土坑・鎌倉時代の土壙墓や掘立柱建物群・江戸時代勝龍寺城跡に関する足軽町の掘立柱建物や茶屋口の門の他堀など、時代幅が広く内容も充実した成果をおさめている。

ここで、当調査地の最近の変遷を、地図から追ってみる。神足駅設置以前の明治22年の地図を見ると、西国街道沿いにまばらな家並みが見て取れるが、当調査位置に家があったかどうかは、明確でない。明治42年の地図では、竹藪の表現になっている。省線神足駅の記載がある大正11年測図の地図では、当地に家屋の表現が無く、竹藪の一角であったことがわかる。昭和28年の地図では、神足駅周辺に広がっていた竹藪が激減し、工場地帯に様変わりとともに、当調査地にも家屋の表現が見られる。昭和45年の地図では、再び家屋の表現が無くなり、昭和61年以後、JR長岡京駅を掲載する平成8年まで建築物のあったことがうかがえる。近隣地在住の古老人によると、かつてグリンピースの工場があり、鍛冶場を備えた自転車店の時もあったという。このように、近現代における当調査地付近の開発は、日中戦争に起因する軍需拡大を契機とし、戦後に民家が急増した状況が読みとれる。それ以前は、西国街道を媒介として展開してきた神足が、東海道本線の開通と、請願駅として生まれた省線神足駅を媒介として移り変わってきた状況がよくわかる。

旧小字名は「堂ノ藪」で、古くから竹藪であったことが察せられるとともに、何らかの大きな建物があった可能性がある。この小字の北東に接して「念佛田」という小字があり、寺院関係の施設かもしれない。また、北接したところは「下馬場」で、南接したところは「馬場ノ辻」という小字である。この両者に共通する馬場は、永井直清を城主とする江戸時代の勝龍寺城に関する地名であろうと考えられている。当調査地は、馬場の間に挟まれた位置にあり、城に関わる施設を表しているとも考えられる。とはいって、いつ頃の呼び名が地名となったのか明らかでないため、地名から当調査地周辺の土地利用を推測する事は難しい。

2 検出遺構

当調査区の土層（第3図）は、現地表土をなす盛土、3～4回程度の整地段階のある近代遺物包含層、竹藪客土かまたは畑の耕作土と考えられる堆積層の、基本的に3層からなる。その下は、大部分が黄色系粘質シルトであったが、東部では黄色系礫層であった。両層とも無遺物層で、当調査の地盤をなしていた。検出遺構には、弥生時代から現代のもの（第4図）まであったが、近代以前の遺構は、すべて黄色系粘質シルトまたは礫層上面で検出した。遺構検出面標高は、調査区東辺で20.4m、南西隅で20.1mで、北東から南西に緩やかに傾斜していた。以下、新しい遺構から順に報告する。尚、付表-2に柱穴以外の遺構から、付表-3に柱穴状の遺構から出土した主要な遺物内容と、遺物と埋土から想定できる所属時期について略記した。

（1）近世以後の遺構（図版三（1））

近世以後の遺構は、盛土または盛土直下から掘り込まれた現代、近代包含層から掘り込まれた近代、地盤層上面から掘り込まれた近世に分けた。

現代のものは、第4図（1）に攪乱表現で示したもので、調査区北西隅にある浄化槽設置坑、ほぼ中央にあるコンクリート製井戸側の井戸、南東隅にある土坑、南北方向の溝S D14がある。南東隅の土坑には、底に灰や炭が層をなして堆積し、床面に焼けた跡があることから、焼却坑または鍛冶関連施設と考えられる。この他、漆喰製の便槽2基が調査区南部東よりで検出した。

近代遺構には、桟瓦や摺絵染付などの陶磁器などが出土した遺構群である。遺構の形態と深さなどの特徴により井戸・円形土坑・楕円形土坑・方形土坑・柱穴状遺構・不整形土坑の6種に分けられる。

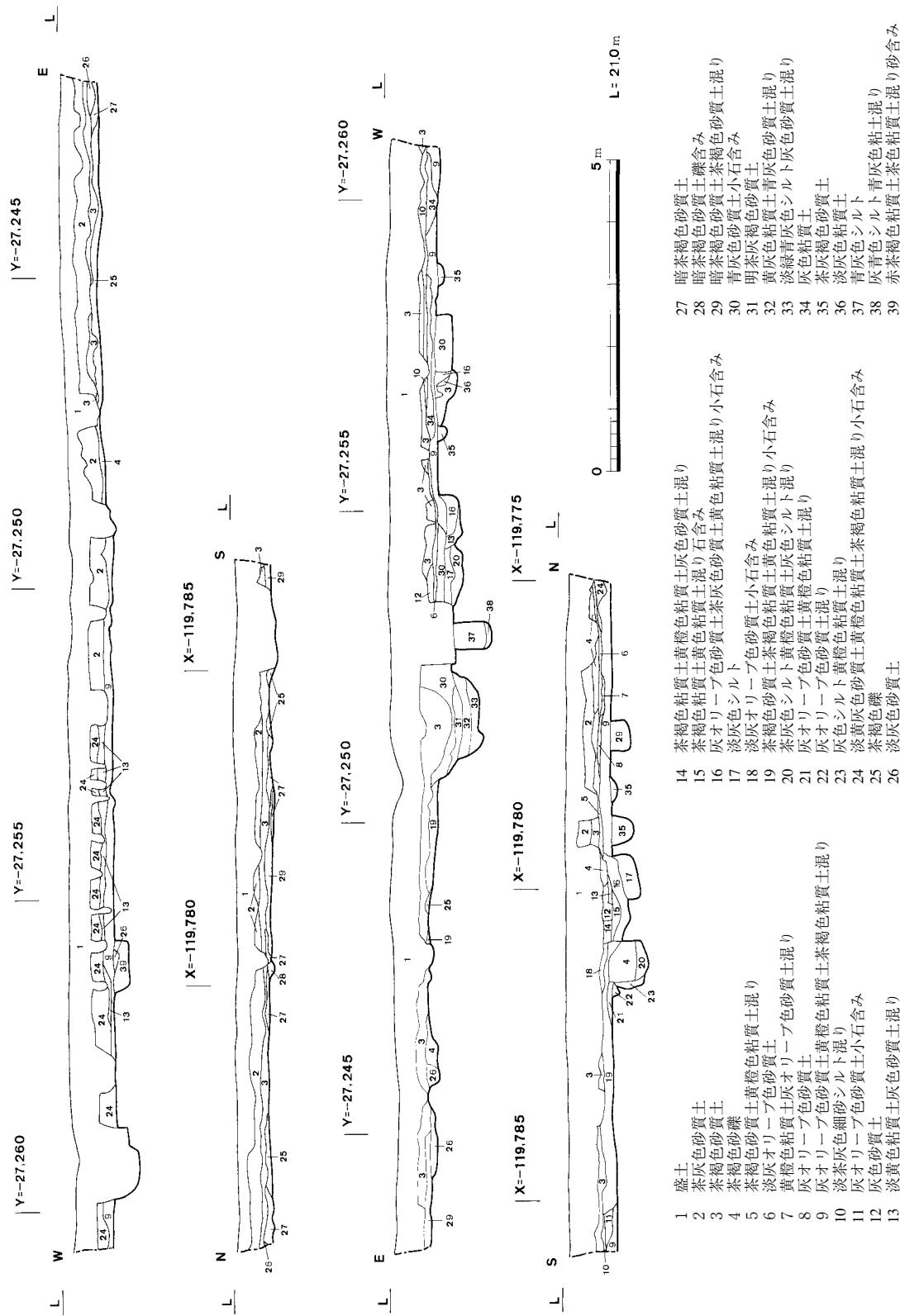
井戸 掘形が円形で、深さ1m以上の掘り込みをもち、雨水の浸透が早く、保水しない遺構を井戸とした。井戸にはS E10・29・48がある。井戸S E10は直径約2.5mの円形掘形で、約1m掘り下げたが、井戸側は検出できなかった。井戸S E29は直径約4mの円形掘形で、井戸S E48を削って築かれている。約1.1mまで掘り下げたが、明確な井戸側は検出できなかった。しかし、直径約2mから3mの範囲に、ドーナツ状に礫の集積があり、石組みの井戸側であった可能性がある。集積した礫には、拳大から人頭大程度の石に混じって、石臼や砥石の他、破碎漆喰片が混じっていた。井戸S E48は、直径約3.5mの円形掘形をもち、直径約2mの範囲に土層の違う堆積が見られた。しかし、約1m掘り下げたが、井戸側は検出できなかった。

円形土坑 円形土坑には、直径2m近い土坑S X37、直径1.6～1.7mで底面が平坦な土坑S X01・02・08、直径0.9～1.2mで、深さが0.4m以下の土坑S X07・11・19・39・50、直径0.7～1mで、深さが0.5～0.65m前後で深い土坑S X30・40・56の4形態に分けることができる。

土坑S X37は、4層からなる埋土で中央部が常に窪んだ状況で各層が平均した厚さで埋まっていったことがわかる。

土坑S X01・02・08の土坑群は、底面が平坦で、円筒形の掘形を呈している。土坑S X08には漆喰が底面から側面まで塗られていた。当地域が畑や竹藪時に設置された肥溜め用の野壺である

4 検出遺構



第3図 調査区土層図 (1/100)

可能性が高い。同様の土坑は、調査区南辺で検出したS X61の上にもあった。調査区土層図（第3図）に表現したように、盛土からの掘り込みで、深さ0.5mあるが、遺構検出面まで達していない。このため現代の項には記さなかったが、直径約1mの規模で、土坑S X01・02・08に類似する特徴を持つ。土坑S X01は土坑S X02を削って築かれている。

浅い円形土坑群には、縁辺部が深くなっていたり（S X19）、一方が深くなっているもの（S X07）などがあり、植木の移植跡の可能性がある。

直径のわりに深さのある土坑群S X30・40・56は、底面が水平で円筒形の掘形をもつ点が、直径の大きい土坑群（S X01・02・08）と類似する。しかし、漆喰等の施設は検出できなかった。このうち土坑S X40の底面に接して漆器椀が出土した。

楕円形土坑 長径約1m、短径約0.6m前後の土坑S X20・23・27などと、長径約1.3m、短径約0.9mの土坑S X15、長径約1.9m、短径約1.5mの土坑S X25などがある。土坑S X20・23・27の群は、井戸や不整形土坑との前後関係が把握でき、中でも最も新しい土坑群と考えられる。

方形土坑 土坑S X09・18・24の大規模のものと、土坑S X22の小規模なものがある。土坑S X09は深さ0.1m前後、土坑S X18は深さ0.5m前後、土坑S X24は0.2m前後であった。土坑S X22は、一辺1.3m前後で、深さ0.6mの規模をもち、土坑S X01と02に削られている。柱穴状遺構には、S X42などがある。埋土は灰色の砂利層で、他の柱穴群と全く異なる。他に、溝S D14の東に接して、一辺0.2mの方形掘形をつものなどがある。この柱穴の埋土は青灰色シルトであった。

不整形土坑 上記した掘り込みの他、形の整わない大小の窪みなどがある。深さは、S X21・53・61などは0.45～0.6mと深いが、浅いものが多い。

近世の遺構には、井戸S E45と溝状土坑S X03・S X05A、不整形土坑S X05B・同C・同D、柱穴状遺構S X44などがある。

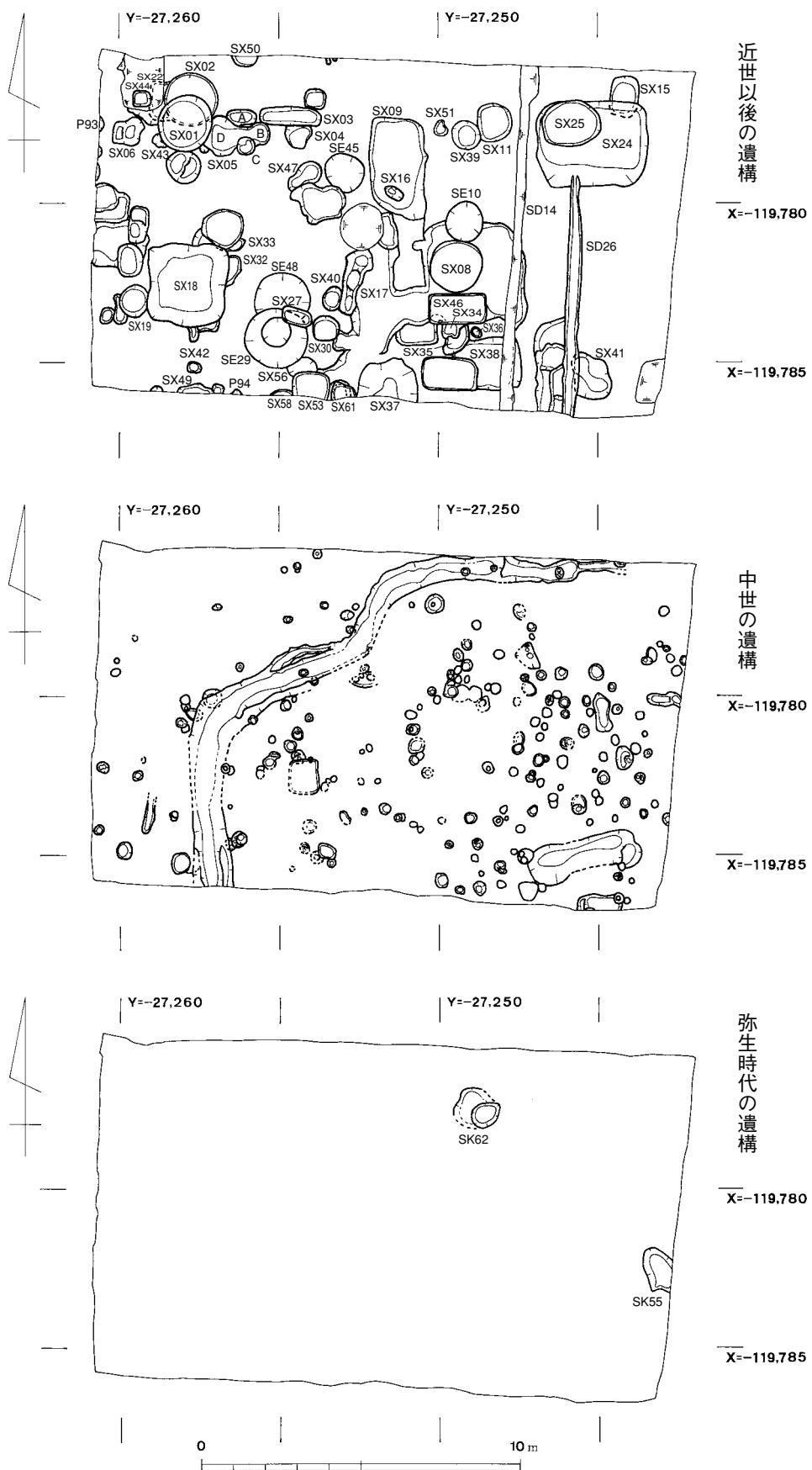
井戸S E45 直径約1.1mの円形掘形で、2.3mまで掘り進んだ（第5図）。埋土は茶色系で、礫層と砂質土または粘質土の互層になっていた。遺物は第2層の礫層に多かった。出土遺物のほとんどは中世段階の所産であったが、わずかに伊万里染付や折縁唐津が出土した。このことから、17世紀後半に位置付けた。ただし、所属時期の基準となる土師器皿は、ほとんどが15世紀の所産で、17世紀に下るものはなかった。深さ1m前後で、壁面の崩落により袋状に膨らみ、安全性の問題から、掘削作業を中断した。

（2）中世遺構（図版二・三（2））

付表-2 柱穴以外遺構出土主な遺物一覧

遺構名	時期	出土遺物	遺構名	時期	出土遺物
S X01	近世	棟瓦・陶磁器	S X33	近世	陶磁器・瓦器椀
S X02	近世	棟瓦・陶磁器	S X34	近世	陶磁器・瓦器椀
S X03	近世	陶磁器・瓦	S X35	近世	陶磁器・土師器皿
S X04	近世	陶磁器・弥生土器	S X36	中世	瓦器椀・土師器皿
S X05	近世	陶磁器	S X37	近世	陶磁器・土師器皿
S X06	近世	土師器皿・瓦器椀	S X38	近世	陶磁器・瓦器椀
S X07	近世	陶磁器・瓦	S X39	近世	瓦・須恵器鉢・土師器皿
S X08	近世	陶磁器・須恵器	S X40	近世	陶磁器・土師器皿
S X09	近世	陶磁器（仏飯器）	S X41	近世	陶磁器・土師器・伏見人形
S E10	近世	陶磁器・瓦	S X42	近世	陶磁器・土製人形
S X11	近世	陶磁器・弥生土器	S X43	近世	陶磁器・須恵器
S X12	近世	平瓦・土師器皿	S X44	近世	ナシ
S D13	15c.	土師器皿・瓦器椀	S E45	近世	集付・土師器皿・須恵器
S D14	現代	平瓦・陶磁器	S X46	近世	陶磁器・須恵器
S X15	近世	陶磁器	S X47	近世	陶器・土師器皿・瓦器椀
S X16	近世	土師器皿	S E48	近世	瓦・陶磁器
S X17	近世	瓦・陶磁器	S X49	近世	瓦器椀
S X18	近世	陶磁器・土師器	S X50	近世	瓦・陶磁器
S X19	近世	土師器皿・弥生土器	S X51	近世	弥生土器
S X20	近世	瓦瓦・陶磁器・瓦口	S K52	中世	土師器・瓦器
S X21	近世	棟瓦・陶磁器	S X53	近世	弥生土器
S X22	近世	陶磁器・紅壇	S K54	13c.	土師器・瓦器・陶器
S X23	近世	瓦・陶磁器	S K55	弥生	弥生土器
S X24	近世	瓦・陶磁器・石製鏡	S X56	近世	陶磁器・弥生土器
S X25	近世	瓦・陶磁器	S X57	中世	瓦器椀
S D26	近世	陶磁器・土製人形	S X58	近世	弥生土器
S X27	近世	陶磁器（線香立て）	S D59	中世	土師器皿・瓦器椀
S X28	中世	土層陶磁・下附黒土	S X60	中世	瓦器椀・土師器皿
S E29	近世	瓦・陶磁器・瓦壁	S X61	近世	陶磁器
S X30	近世	瓦・陶磁器	S K62	弥生	弥生土器
S X31	中世	P G2に変更	S X63	中世	瓦器椀・土師器皿
S X32	近世	瓦・陶磁器			

6 検出遺構



第4図 検出遺構変遷図（1/200）

13世紀から15世紀の遺構には、柱穴群や土坑と溝などがある。このうち、柱穴の所属する時期については、不確定要素が大きい。

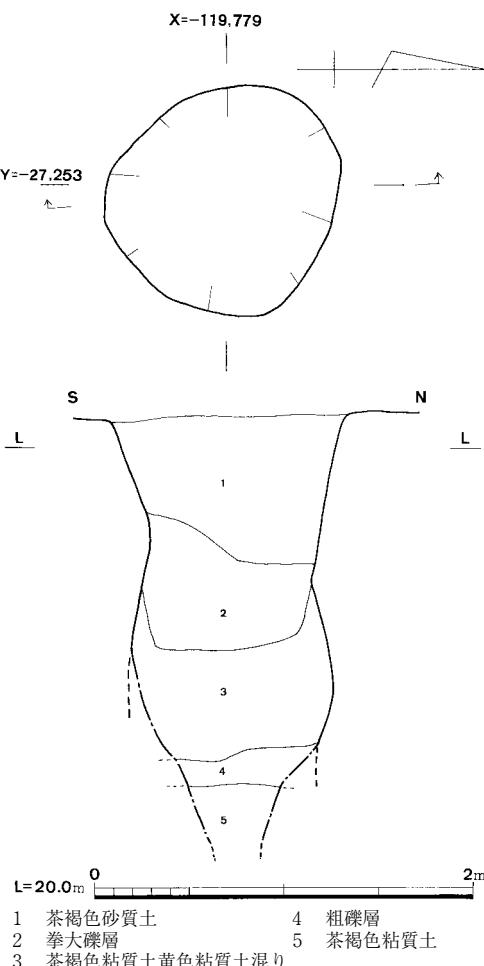
溝 S D 13 調査区北東部から、蛇行しながら南西方向に向かう溝で、溝底標高から、基本的に北東から南西に排水する施設と考えられる。溝幅は、南西部で1.3mあり、北東部では削平を受けて0.6m前後まで細くなり、消滅していた。深さは、南西部で0.6m、北東部では削平を受けて浅くなり、消滅していた。また後述する1C区では、幅0.4m、深さ0.1m前後の溝に枝分かれし、再び合流していた。溝内埋土は、基本的に4層からなり、北東部では、最上層のみになっていた。埋土には、流れによる堆積や澱んだ状態での堆積など、水中堆積層と考えられるものはなかった(第7図)。遺物の出土状況には特筆すべき特徴があった。A断面記録位置から近世井戸S E 45までの間(1B区)に大量の土師器皿が、西肩添いで出土した(図版五(2)・六(1))。これより南西に向かってA・Bの2条に分かれ、再び合流する部分(1C区)では出土量が減る。しかし完形品の土師器皿がSD13Aから2枚出土した(図版五(1))。さらに南西に進んで南に折れ曲がり、近代土坑SX18に削られた位置までの範囲(2C区)では、拳大から人頭大の礫の集積があった(図版四(2))。近代土坑SX18から調査区南辺に入り込むまで(3C区)には、礫がほとんど無くなり、土器類もわずかであった。これらの土器や礫の出土層は、ほとんどが第1層からで、最下層からの出土遺物はわずかであった。

土坑 S K 54 東西0.75m、南北0.5mの楕円形土坑で、深さ約0.45mを測る。検出面直下には、北辺で瓦器碗の完形品が出土し、埋土には、拳大の礫や、瓦器碗、土師器皿、瀬戸天目茶碗が出土した(第9図)。墓壙の可能性がある。

柱穴群 数多い柱穴には柱痕のわかるものも数多くあった。しかし、建物や柵などとして捉えることはできなかった。付表-3で示したように、ほとんどの柱穴から土師器皿や瓦器碗が出土し、遺物からは13世紀が主と考えられる。しかし、15世紀の所産もかなりあると思われる。柱痕がわかるものの他に、柱穴の上に石を置いたもの(P5・71など)もある。石は平坦な面を上に据え置いている。P71の石は、焼成を受けていた。(第8図)。

(3) 長岡京期の遺構

当期の遺構は、柱穴1基以外に検出できなかった。P48は、0.5m四方の隅円方形に近い掘形で、深さ約0.1mと浅い。直径約0.2mの柱痕がある。掘形の埋土から出土した土師器甕の小破片から、長岡京期としたが、

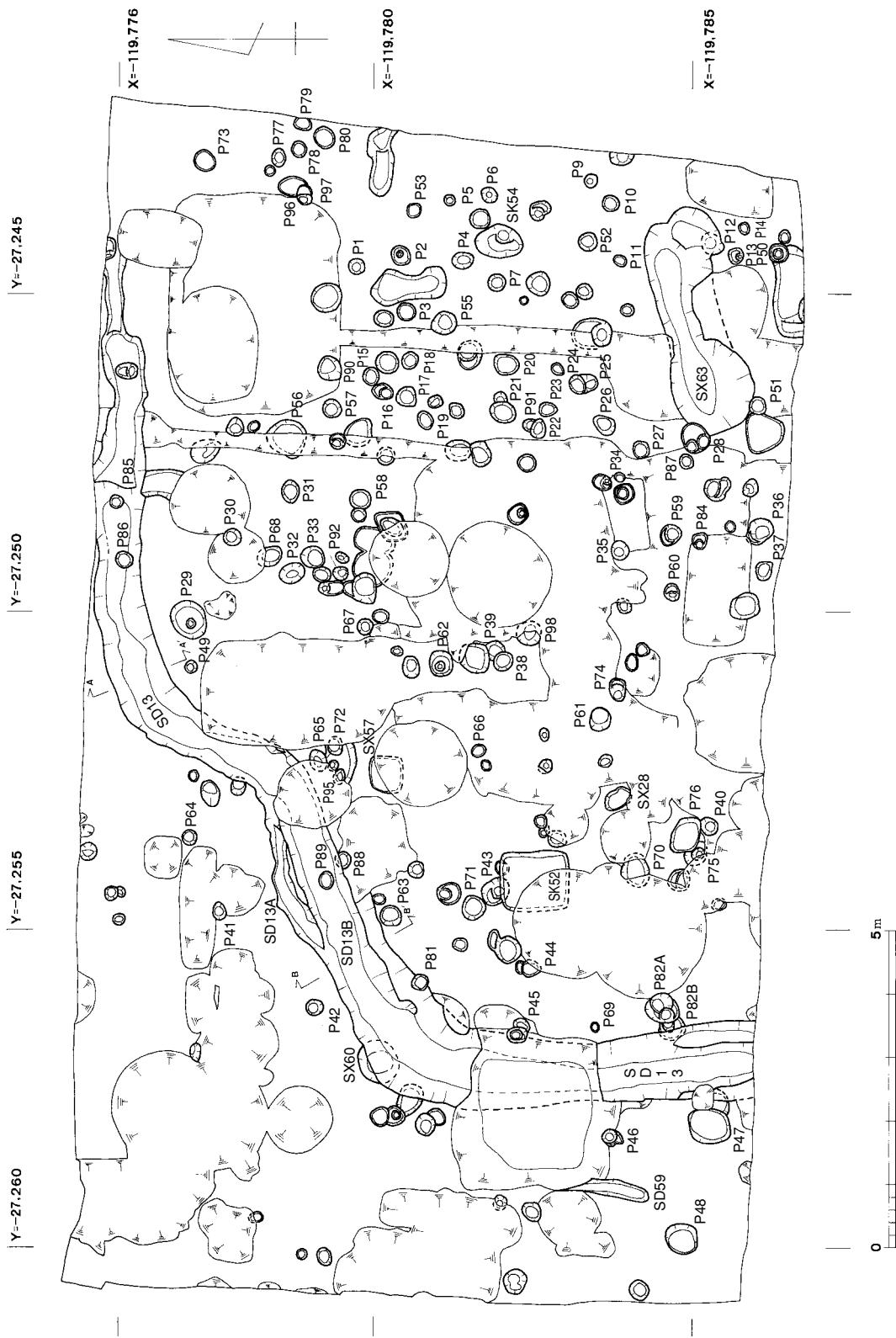


第5図 井戸 S E 45実測図 (1/40)

8 検出遺構

明らかでない。類似する大きさや深さの柱穴は、他にP47・76などがある。しかし、P47からは瓦器椀が出土しており、中世と考える。P76からの出土遺物はなかった。

(4) 弥生時代の遺構



第6図 平安時代から中世にかけての遺構実測図 (1/100)

弥生時代の遺構には、不整形な土坑2基がある（第4図(3)）。

土坑S K55 調査区東辺で検出したもので、幅約1mの細長い掘形である。深さ4cm前後と非常に浅く、調査区外に南東にのびる。詳細な時期は明らかでないが、中期の土器片が出土した。

土坑S K62 南北1.3m東西1.5mの土坑で、南東部が直径0.8m程度の円形に深くなっていた。深さは、西半部で約20cm、東南部の最も深い位置で約30cmであった。所属時期を決定付ける遺物はないが、中期と考えられる。

3 出土遺物

出土遺物には、弥生土器、古墳時代須恵器、長岡京期土師器・須恵器・瓦、鎌倉～室町時代の中世土師器・瓦器・陶磁器・金属製品、江戸時代以後の近世・近代土師器・陶磁器・瓦・金属製品などの他現代の遺物がある（第10図、図版七～一五）。近代陶器には墨書のあるものが含まれ、近世井戸からは青銅製仏像が出土したり、中世遺構からは豊富な遺物が出土した。

(1) 近世～近代遺構出土遺物

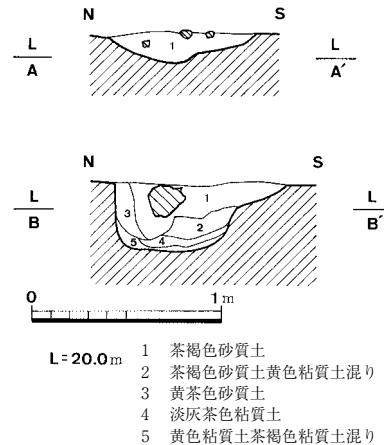
近代遺構出土遺物は、陶磁器が主で、鉄釘などがあったが、土師器皿はほとんど無かった。

土坑S X02出土遺物（80～83） 80・81の染付碗は直径10.8cm、器高5.1cmで、内面に見込蛇ノ目釉ハギを施す。82の皿は、直径12cm、器高3.6cmで、内面に見込蛇ノ目釉ハギを施している。高台は無釉で、露胎の底部高台内に「長」の下端かと思われる墨書がある。83は、薄茶色に発色した貫入の多い釉調で、内面の花文は花弁などを呉須で、子葉を鉄釉で描いている。

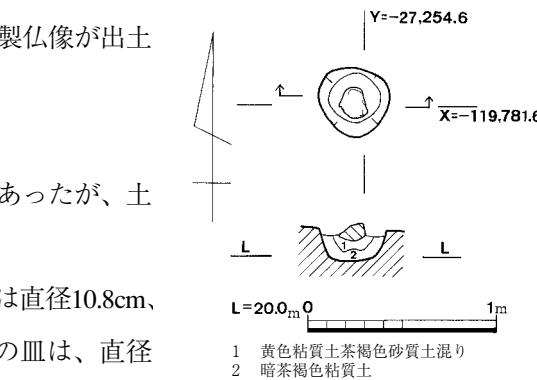
土坑S X03出土遺物（128・129） 128は玉縁部のある丸瓦で、長さ30.9cm、幅16cmを測り、玉縁部の長さは3.6cmである。129は、幅約3.5cm、厚さ約1cmの砥石である。

土坑S X09出土遺物（116・117） 116は草花文を描いた染付で、口径10cm、器高6cmを測る。117は、陶製硯で、幅7cm、周縁部厚さ1.7cmを測る。かなり使い込まれ、陸部が滑らかに大きくへこむ。この他、染付の仏飯器などもある。

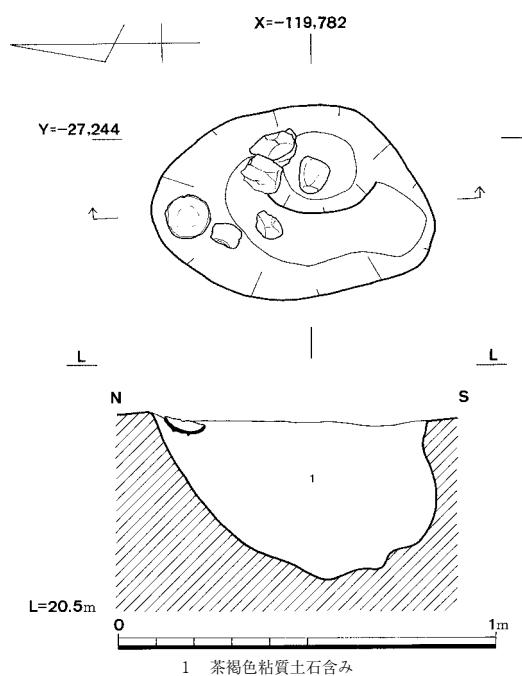
井戸S E10出土遺物（84～91） 84の染付碗は摺



第7図 溝S D13土層図（1/40）



第8図 柱穴P71実測図（1/40）



第9図 土坑S K54実測図（1/20）

絵装飾で、外面を半円弧文で埋め尽くされ、内面の口縁部縁辺には花房状装飾が巡る。85の染付碗外面には二重網目文が施されている。87は瀬戸焼の鉢、88は壺体部片である。89は白く硬い素焼きの陶器底部で、底面に「八五□」と墨書きされている。最後の文字が明確でないが「丈」の書体のように見えるが、意味不明。「才」または「夫」かもしれない。90はいわゆる御神酒徳利の壺で、外面に青い釉が施されている。91は平瓦短側面に、長径1.5cm、短径0.8cmの小判形印があり「儀」と明瞭に読める。この瓦片は、棟瓦片の可能性がある。

土坑S X 11出土遺物（118） 118は口径7.8cm、器高4cmの小型の草花文染付碗である。体部にかなり丸みがある。

土坑S X 20出土遺物（130） 棟瓦や陶磁器類に混じって、130のフイゴ片が出土した。直径7cmの柱状部をもち、先端は半球形におさめている。中心部を貫く送風孔は、柱状部で直径3cm、先端部で直径2cmと細くなる。

土坑S X 23出土遺物（131） 陶磁器の碗皿類や擂鉢などに混じって、131の軒瓦片が出土した。

土坑S X 24出土遺物（132・133） 染付の壺底部や草花文茶碗などとともに、中世白磁碗の玉縁口縁破片（133）や、近代土製品（132）が出土した。

土坑S X 25出土遺物（119～124） 119は、口径7.5cm、器高10.2cm、底部径5.3cmの白磁壺で、最大径が体部上端ちかくにある。120は、口径10.2cm、器高7cm、高台径5cmの陶胎筒形火入れで、青白色の半透明に発色した釉が分厚くかかる。底部は鉄釉のように赤茶色に発色している。底部中央に焼成後内面から叩いて穿孔した直径約1.5cmの穴がある。植木鉢としての再利用が考えられる。121は、口径7cm、器高5.3cm、高台径3.5cmの筒形碗で、内面に五弁花のコンニヤク判が、底部外面に1対の染付装飾がある。122は、口径10cm、器高3cmの染付蓋で、外面に群鶴が、内面の天井部に環状松竹梅文、口縁に四方櫻文が巡る。123は、口径10cm、器高3cmの外面青磁の蓋で、内面中央に五弁花の、口縁部に四方櫻文の装飾があり、環状つまみ内の方形枠に渦福と思われる字銘がある。124は、軒棟瓦で、全長30cm、瓦当面厚さ4.3cm、内区厚さ4.3cmをはかる。

土坑S X 27出土遺物（125・126） 125は、口径3cm、器高6cmの円筒状染付で、底部は六角形の板状に仕上げている。線香立てと思われる。126は長さ4.7cm、直径0.4cmの棒状石製品である。

土坑S X 28出土遺物（134） 上層から、陶磁器とともに、円盤状石製品（134）が出土した。砂岩製である。遊戯具かと思われる。

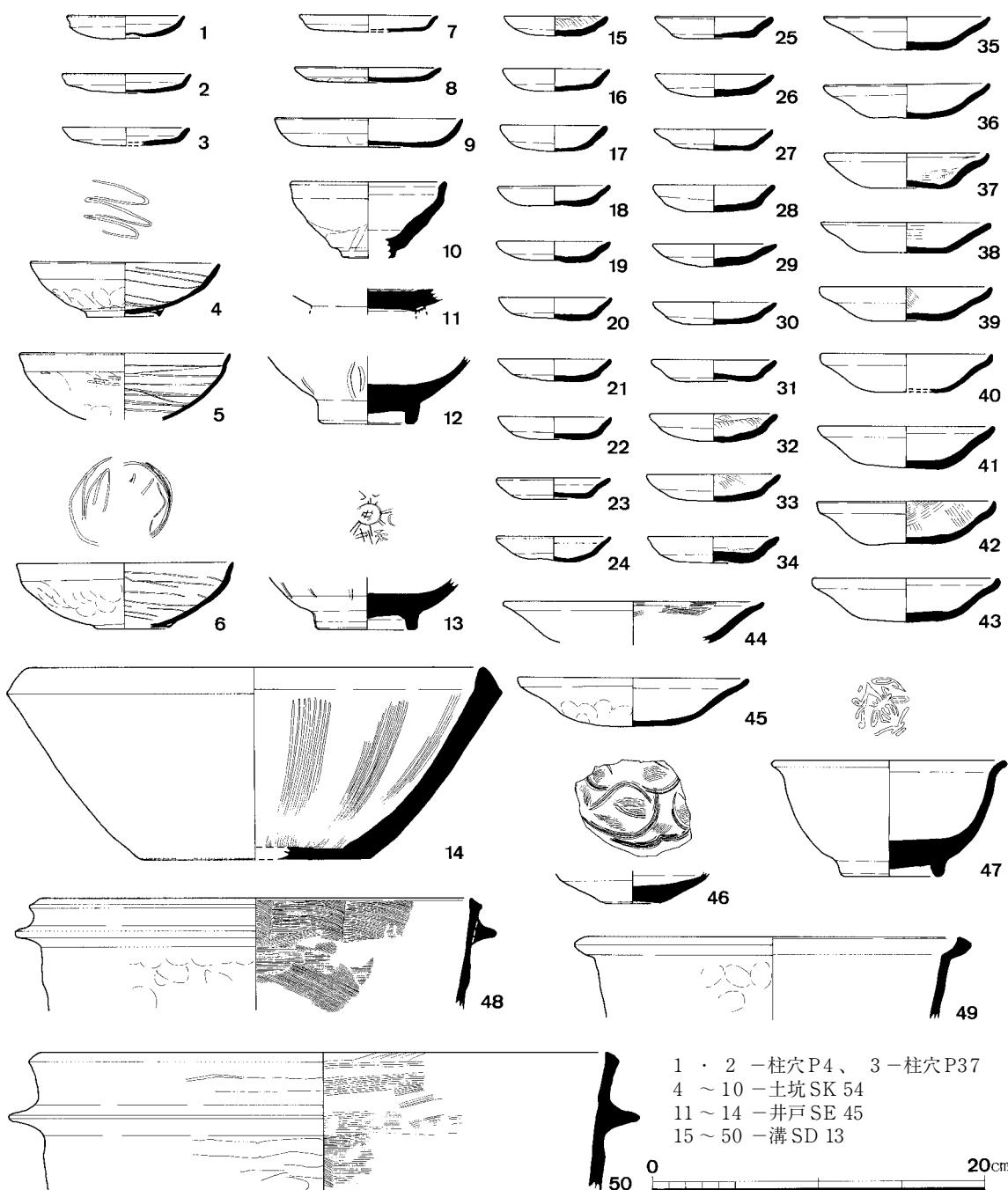
付表-3 柱穴出土主な遺物一覧

番号	時期	遺物内容	番号	時期	遺物内容	番号	時期	遺物内容
p.1	13c	瓦器焼	p.33	13c	土師器皿・瓦器焼	p.65	13c	瓦器焼・羽釜?
p.2		土師器ヶ生土器?	p.34		再生土器	p.66	13c	土師器皿・瓦器焼 須恵器焼・再生土器
p.3	13c	瓦器焼	p.35	近世	染付焼・土師器皿・ 瓦器焼	p.67	13c	瓦器焼・羽釜・ 再生土器
p.4	中世	土師器皿						
p.5	15c	土師器皿・瓦器焼・ 須恵器鋸	p.36	13c	土師器皿・瓦器焼	p.68	13c	再生土器
p.6	13c	土師器皿・瓦器焼	p.38	15c	土師器皿・瓦器焼	p.69	13c	瓦器焼
p.7	13c	土師器皿・瓦器焼	p.39	13c	土師器皿・瓦器焼・ 瓦器割	p.70	13c	土師器皿・瓦器焼 土師器鍋
p.8		須恵器供養用盤・ 土師器ヶ生土器?	p.40	13c	瓦器焼	p.71	13c	土師器皿・瓦器焼 須恵器盤
p.9	13c	土師器皿	p.41	13c	瓦器焼			
p.10	13c	土師器皿・瓦器焼	p.42	13c	土師器食膳形盤・ 瓦器焼	p.72	13c	土師器皿・瓦器焼 再生土器
p.11	13c	土師器皿・瓦器焼	p.43	15c	土師器皿・瓦器焼・ 土師器・(瓦器)羽釜	p.73	中世	土師器皿
p.12	中世	土師器皿						
p.13	13c	瓦器焼						
p.14	中世	土新器皿	p.44	13c	瓦器焼・羽釜	p.75	13c	土師器皿
p.15	13c	土師器皿・瓦器焼	p.45	13c	土師器皿・瓦器焼	p.77	中世	染付焼・土師器皿
p.16	13c	土師器皿・瓦器焼	p.46	近代	伐瓦・瓦器焼	p.78	15c	土師器皿・瓦器焼
p.17	13c	瓦器焼	p.47	13c	土師器皿・瓦器焼・ 瓦器割裂・須恵器	p.79	中世	土師器皿
p.18	13c	土師器皿・瓦器焼				p.80	13c	土師器皿
p.19	中世	土師器皿	p.48	瓦岡	土師器皿	p.81	13c	土師器皿・瓦器焼 瓦器焼
p.20	13c	土師器皿・瓦器焼	p.49	再生土器				
		須恵器鋸	p.50	13c	土師器皿・瓦器焼	p.82	13c	瓦器焼・羽釜・錫
p.21	13c	土師器皿・瓦器焼	p.51	13c	土師器皿・瓦器焼	p.84		吉磁碗
p.22	13c	瓦器焼	p.52	13c	土師器皿・瓦器焼	p.85		再生土器
p.23	13c	瓦器焼	p.53	13c	土師器皿・瓦器焼・ 須恵器鋸	p.86		再生土器
p.24	13c	土師器皿				p.87	中世	土師器皿
p.25	13c	土師器皿・瓦器焼	p.54		再生土器	p.88	中世	土師器皿
p.26	13c	土師器皿・瓦器焼・ 瓦器羽釜	p.55	13c	土師器皿・瓦器焼	p.89	中世	土師器羽釜分錫 瓦器焼
p.27	13c	瓦器焼	p.56		再生土器	p.90	中世	土師器皿
p.28	13c	土師器皿・瓦器焼・ 須恵器鋸	p.58	15c	土師器・6・壁	p.91	中世	再生土器
p.29	13c	土師器皿・瓦器焼・ 瓦器羽釜・再生土器	p.59	13c	土師器皿・瓦器羽釜	p.92	中世	再生土器
p.30		再生土器	p.61	13c	瓦器焼	p.93	近世	陶磁器・土師器
p.31	13c	土師器皿・鉢・ 瓦器焼	p.62	15c	土師器皿・瓦器焼	p.94	近世	染付皿・陶器粗筋
p.32	13c	土師器皿・瓦器焼	p.64		再生土器	p.95	中世	瓦器焼
						p.96		
						p.97	中世	土師器皿
						p.98	中世	土師器皿

井戸S E 29出土遺物（135～139） 染付碗皿類や棧瓦・軒瓦（135）などとともに、礫集積内から石臼（136・137）、階段状に加工した石製品（138）、鋳造鋳型（139）などが出土した。138の石製品は砂岩製で、階段状の各稜線は、わずかに弧を描く。139・137は花崗岩製。139の鋳型は、凝灰岩の可能性がある。

土坑S X 37出土遺物（112～115） コンニヤク判染付碗（112）や見込蛇ノ目釉ハギの染付皿（113）や土師器皿（114・115）などがある。土師器皿には、底から口縁まで滑らかに内湾するもの（114）と、内面の底部と口縁部界に沈線が巡り、明瞭に区分できるもの（115）がある。

土坑S X 40出土遺物（127） 染付や土師器皿（150）などとともに、127の白磁皿が出土した。



第10図 出土遺物実測図 (1/4)

口径 9 cm、器高 3 cm で、釉は内面から口縁部外面まで施されたものである。

井戸 S E 45出土遺物 (11~14・51・65~71・73・92~104・106・107~111) 11は緑釉陶器碗の底部片で、糸切底、貼り付け輪高台の特徴を持つ。12・13・103・106は輸入青磁碗で、12・13には外面に蓮弁が、13の内面には花文が印されている。106の内面見込みには、蛇ノ目釉ハギが施されている。14は、備前掘り鉢で、口縁部断面を三角形に処理する特徴を持つ。第11図51は、青銅製の仏像で、二段に表現された頭部の頂部に直径約1.5cmの穿孔がある。右手は肘まで下げ、肘から指先までをまっすぐ上に伸ばす。左手は、肘まで下げ、肘から先を水平に構えている。左手の掌に、円形の物を乗せているように見える。目鼻立ちは不鮮明であるが、左目位置に、わずかな凹凸による瞼の表現があり、本来線的な膨らみで輪郭表現されていたものと思われる。65~71は口径 7 cm、器高1.4cm前後の土師器皿で、かつて設定した分類の I 形態である。73は瀬戸天目茶碗で、口径12cm、器高6.2cmを測る。92は口縁部に沈線を巡らした折縁唐津皿である。93~96は染付磁器で、93が皿、他は碗である。97~99は瓦器鉢類、100~102は陶器壺類である。104は糸切り底の瀬戸美濃系陶器壺と思われるもので、淡黄緑灰色の釉が内面と体部外面に見られる。107~110は瓦器羽釜類で、110は小型の三足羽釜である。111は軒平瓦で、厚さ4.8cm、上下の外区厚さ0.9cmを測る。

井戸 S E 48出土遺物 (75~77) 75は型造りの陶器で、皿か蓋と思われる。内面に円形の緑釉が施釉されている。76・77は染付磁器で、76は壺体部片、77は筒形の碗である。

土坑 S X 50出土遺物 (140) 瓦や染付などの陶磁器などとともに砥石 (140) が出土した。自然石を用いたもので、研ぎ面の幅は約 7 cm ある。

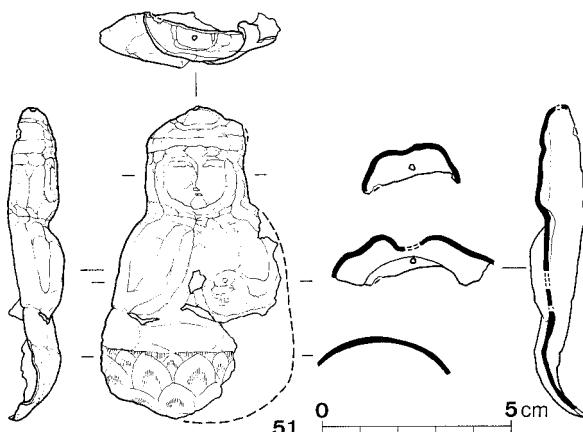
柱穴状遺構 P 94出土遺物 (74) 当遺構からは擂鉢 (74) 1点のみが出土した。口径37.5cm、器高14cmで、直径4.3cm、高さ2.3cmの高い台をもつ。口縁部内面には突帯が巡り、外面には2条の沈線を下端に巡らせる。

他に軒平瓦 (143) や土鈴 (144) などを近代包含層や表土から採集した。

(2) 中世遺構出土遺物

溝 S D 13出土遺物 (15~50・52~64・105・145~149) 土師器皿 (15~45・52~64)、輸入磁器 (46・47・145~147)、瓦器や土師器の鍋・羽釜類 (48~50・148)、鉄製品 (105)、砥石 (149) などがある。土師器皿は、H形態 (35~45)

と I 形態 (15~34・52~64) がある。I 形態は、法量に直径 7 cm、器高1.4cm前後のまとまりがある。H形態の土師器皿は、口径 10cm、器高 2 cm 前後の 35~40 と、口径 10.5cm、器高 2.5cm 前後の 41~43 の小型皿、口径14cm、器高2.5cm以上の44・45の大型品がある。輸入磁器の145・146は白磁、他は青磁で、147の青磁口縁部外面には蓮弁の装飾が見える。149の砥石は厚さ約 9 cm、幅 6 cm



第11図 青銅製仏像実測図 (1/2)

の角柱状石材を用いている。105の鉄製品は、幅1.2cm、付表-4 中世遺構出土遺物破片数統計表

厚さ0.3~0.4cmの板を折り曲げたものである。

土坑S X54出土遺物（4~10・141） 瓦器椀（4~6）、土師器皿（7~9）、天目茶椀（10） 砥石（141）などがある。土師器皿は、口径8.5cm、器高1cm前後の小型品（7・8）と、口径10.4cm、器高1.7cmの大型品（9）がある。141の砥石は、厚さ3.5cmの扁平な石を用い、最大幅7cmの研ぎ面をもつ。

これらの他、近代包含層から、青白磁合子片（142）や土師器皿（72）などを採集した。

（3）長岡京期から平安時代前期の遺物

当該期に相当する遺物には、P48出土土師器甕があるほか、近代包含層から須恵器杯Bや甕体部片など、細片が少量ある。図化できなかったが、土師器甕はいわゆる都城型の形態で、長岡京期から平安時代前期に収まるものと考えられる。井戸S E45出土緑釉陶器は、平安時代の所産か。

（4）弥生時代の遺物

弥生土器は、土坑S K55から出土した破片のなかに、152の櫛書き波状文を施文する壺体部片がある。この他、土坑S X02から154の壺口縁部片、土坑S X19から出土した櫛書き直線文の壺体部片（153）、井戸S E45から出土した壺底部片（155）、土坑S X53から出土した甕の口縁部片（151）などがある。

4 まとめ

当調査では、近世から近代にかけての所産が多かった。西国街道沿いに発展した近代の町並みを知る上で貴重な成果といえよう。また近世では、井戸出土青銅製仏像は珍しい。中世では、土師器皿を大量投棄した15世紀の溝や、瓦器椀完形品を含む一括資料の得られた13世紀の土坑、100基を越える柱穴群などを検出した。これらに関する成果は、北東隣接地の長岡京右京第184次調査成果⁽³⁾とともにまとめる必要がある。その調査では、中世の大規模な方形掘形をもつ建物が検出されており、小字地名の「堂ノ藪」との関わりも考察する必要があるかもしれない。長岡京跡や弥生時代については、性格の明らかな遺構は検出できなかったが、遺物の散布状況が明らかになり、これらの遺跡に関わる土地利用がなされていたことを確認した。

注1) 原 秀樹「右京第184次調査概報」『長岡京市センタ一年報』昭和59年度 1985年

2) 岩崎 誠「長岡京跡右京第606次・神足遺跡発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第14集 1999年

岩崎 誠・木村泰彦「右京第630次調査略報」『長岡京市センタ一年報』平成10年度 2000年

岩崎 誠・木村泰彦「右京第654次調査略報」『長岡京市センタ一年報』平成11年度 2001年

3) 注1に同じ

遺構名	地区	土師器	瓦器	陶磁器	須恵器	合計	地区別%
溝SD13	北東部	118	57	10	3	188	8.6
	1B区	1337	330	4	30	1701	77.7
	1C区	127	22		2	151	6.9
	2C区	26	32		2	60	2.7
	3C区	34	52		4	90	4.1
種別 合計		1642	493	14	41	2190	100
種別 %		75	23	0.6	1.9	100	△△
土坑SK54		201	60	2	1	264	△△
種別 %		76.1	23	0.8	0.4	100	△△

第2章 長岡京跡右京第724次（7 A N M D B - 5 地区）調査概要

—右京六条一坊十二町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡—

長岡京駅西口地区市街地再開発事業に伴うC-12地区の調査

1 調査経過

今回の調査は長岡京駅西口再開発事業に伴って実施したC-12地区に関するものである。調査地はJR長岡京駅の南西約150mの住宅地内にあり（第2図）、調査以前には民家が建てられていたが現状では解体・整地されている。地形分類上は低位段丘Ⅰにあたり、現状の整地面での標高は20.6mである。今回の調査地周辺では、南東に隣接する工場跡地において長岡京駅西口再開発事業に伴って実施した右京第606^(注1)・630^(注2)・654^(注3)調査が行われ、江戸時代勝龍寺城、長岡京期および弥生時代、古墳時代、鎌倉時代の神足遺跡に関して多くの成果が得られている。このうち長岡京期では、他に例を見ない整然と配置された30棟近くの大規模な建物群が検出され、建物の配置状況から2町ないし4町域という広範囲にわたる宅地利用がなされていたと推定されている。また長岡京では初例となるカマドが複数存在し、供膳形態の土器と共に多量の製塩土器が出土する一方、井戸が1基も存在しないなど、特異な状況も明らかとなっている。当調査地内は上述の調査で明らかではなかった六条条間南小路が通る箇所にあたり、その確認が期待されるところであった。また弥生時代に関しても大規模な方形周溝墓群が検出されており、今回の調査地は北西に隣接した場所にあたることからそれらの広がりが予想された。

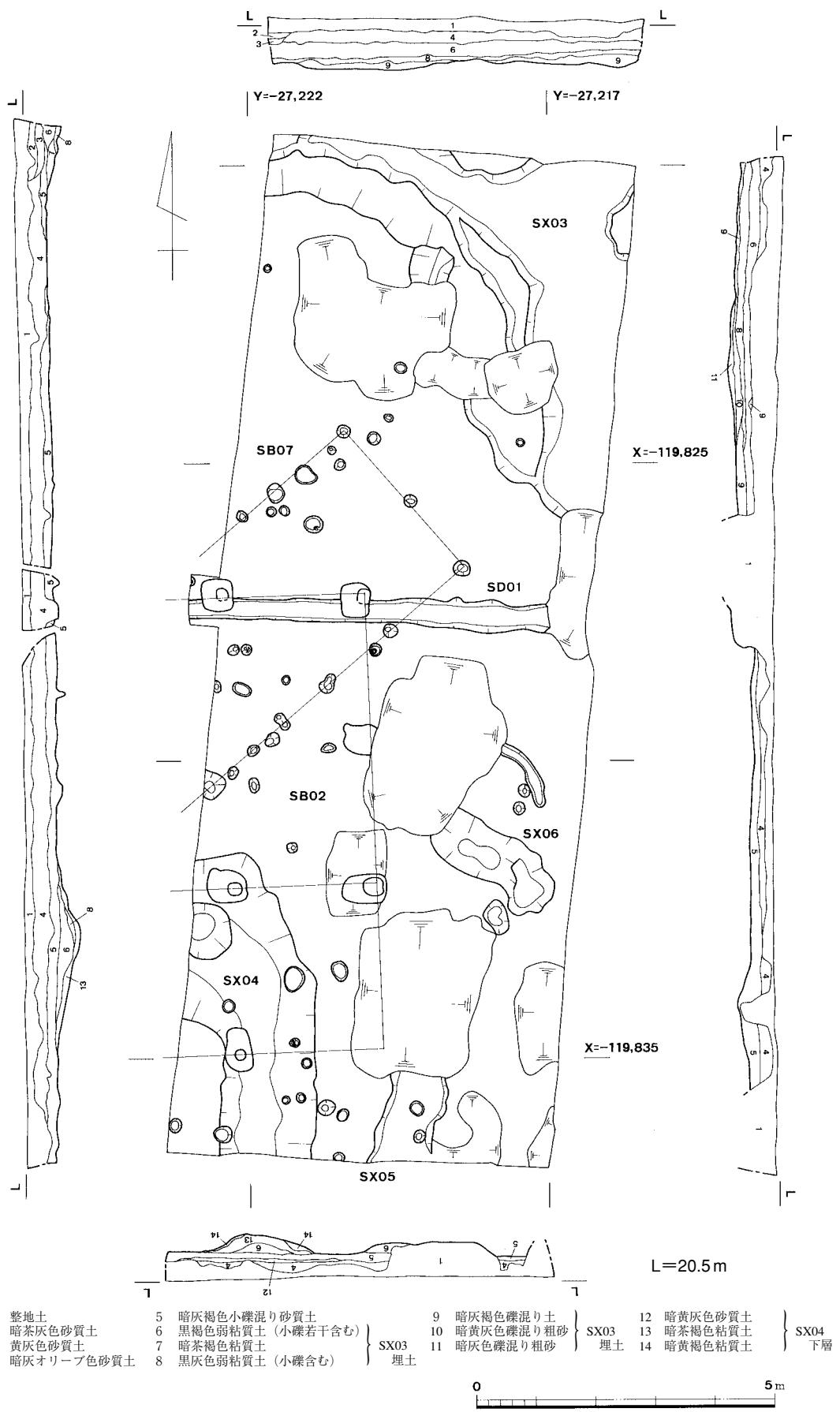
調査地は周囲を住宅に囲まれており、土置場が確保できないため、南北2回に分けて調査を行うこととした。2001年11月12日、まず調査地内の北半部に南北8.5m、東西6mの矩形トレンチを設定、重機で盛土・耕作土の除去を行った後人力にて掘り下げを行った。遺構実測・写真撮影を終えた後、11月21日に一旦埋戻しを行い、明くる11月22日にあらためて南側に南北9m、東西6mのトレンチを設定し、再度調査を行った。また長岡京期の掘立柱建物SB02検出に伴い、確認のため部分的に西側に拡張を行っている。12月4日に現地での調査をすべて終了した。



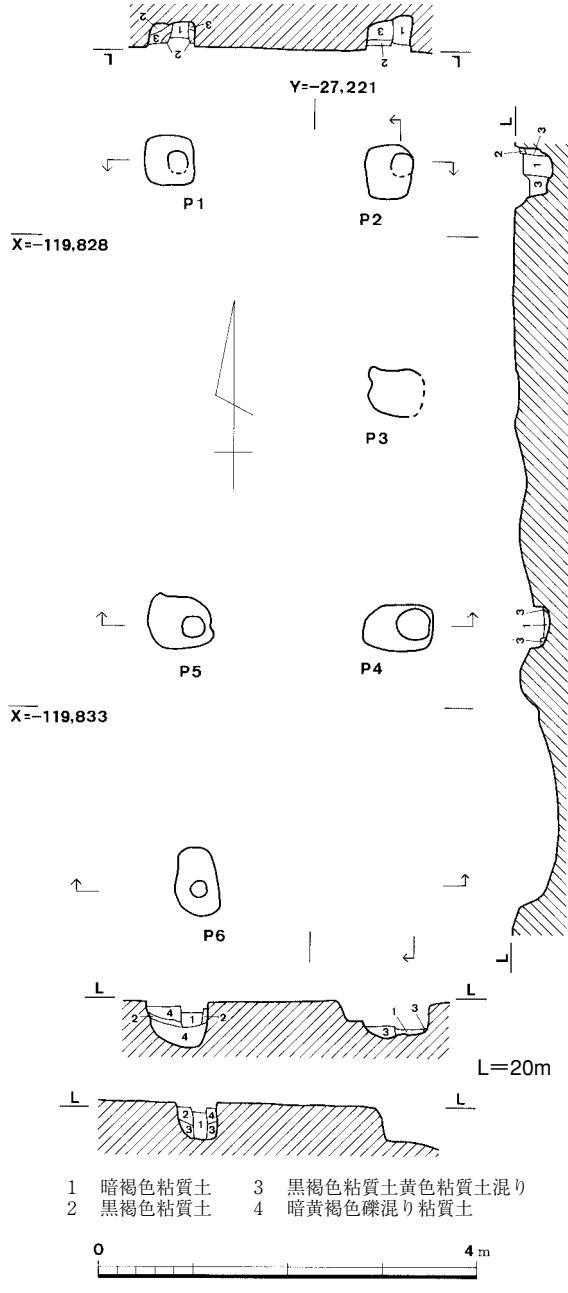
第12図 北調査区調査風景（南から）



第13図 南調査区調査風景（北から）



第14図 検出遺構図・土層図 (1/100)



第15図 掘立柱建物 S B02実測図 (1/80)



第16図 掘立柱建物 S B02 P 1 検出状況 (南から)

2 検出遺構

調査地内の基本層序は、建物解体時の整地土（第1層）が約0.2m、その下に民家が建てられる以前の竹藪の客土（第4層）が約0.2mあり、さらに0.1mの遺物包含層（第5層）が認められた。それらを除去した段階で地山面にいたる。地山は西側が黃灰色粘質土であるが、東側では礫混じりの暗褐色土へと変化している。この面で主に長岡京期、弥生時代の遺構が検出された。遺構面の標高は、北西部20.1m、南西部20.0mである。調査地内は建物解体時の搅乱が多く、また民家の井戸がそのまま残されているなど調査可能面積は少ないものであった。

(1) 近代の遺構

溝 S D 01 調査地中央部で検出された東西方向の溝で、埋土は竹藪客土（第4層）と同一である。幅0.5m、深さ0.2mでおそらく以前に存在した竹藪の地境溝と見られる。中からは染付陶器の皿と、擂鉢の小片が出土した。

(2) 長岡京期の遺構

掘立柱建物 S B 02 調査地南半部で検出された南北2間、東西2間以上、南に1間の廂を持つ東西棟建物で、南東隅廂の掘形は搅乱により未確認である。掘形は一辺0.5~0.7mで、北側のP 1~3は隅円方形、南側P 4~5は隅円長方形を呈する。深さは浅いP 3で0.1m、深いP 5は0.5m、他は0.3m前後で、内部に直径約0.2mの柱跡が確認される。このうちP 5は、掘形底部に土を入れて柱の高さを調整している。柱間は身舎が2.4m等間、廂は2.7mである。掘形内の遺物は全体に極めて少量・小片であるが、須恵器杯B・蓋、土師器の供膳形態、平瓦片等が出土している。

(3) 弥生時代の遺構

方形周溝墓 S X03 調査地北東部で検出された南東から北西方向の溝で、方形周溝墓の周溝と見られるものである。溝は北部で緩やかに西側に湾曲している。全体に深さは0.3mと浅く、特に南側肩部の傾斜は緩やかで不明瞭である。幅は部分的な検出のため不明であるが、下場の状況から3m以上あるものと見られる。また北西隅の底部の状況から北東部にも別の溝が延びるようにも思われる。埋土は北側で2層、南側では4層あり、南側のみ底部に砂礫の堆積が認められる。溝内からは、ほぼ全体から遺物が出土しているがいずれも細かな破片が多く、供献状態を示すようなものは認められなかった。

方形周溝墓 S X04 調査地南西部で北東隅部付近が検出されたものである。東側の周溝はほぼ南北方向に伸びた後、北で西側に折れ曲がる。西側の周溝は幅約1.5m、深さ0.3mで、北東隅部では幅が約2.5mと広くなり、西壁際では部分的に約0.15mほど深くなっている。状況から見て周溝内の埋葬施設の可能性があるが、明確な棺の痕跡や供献状態を示すような遺物などは検出されなかった。埋土は基本的に3層で、方形周溝墓 S X03に比べ、全体に遺物は少なく、かつ小片が多い。

落ち込み S X05 調査地の南辺部で検出された幅約1m、深さ0.1mの落ち込みである。溝ないしは土坑の一部とも考えられるが、北側と南東部を搅乱によって切られているため全形および明確な規模は不明である。弥生土器の小片が少量出土している。

落ち込み S X06 調査地南半部で検出された、北西から南東方向を向く不整長楕円形を呈する落ち込みである。幅1m、深さは東側で0.3m、西側では深く0.5mである。上面で弥生土器が少量検出されたため当初は弥生時代の遺構と認識したものであるが、状況・形態から見て当地周辺で確認されるしみ込みと考えられる。

(4) その他の遺構

掘立柱建物 S B07 調査地西半部で検出された南北2間、東西4間以上と見られる小規模な建物で、円形の掘形を持つ。掘形は直径約0.2~0.3mで、柱間は約1.5mである。南北の調査地にまたがって検出されたため、調査時は建物とは認識できず図上で確認したものである。遺物が全く出土していないため時期の決定は困難であるが、小規模な円形の掘形を持つこと、方位が振れることなどから鎌倉時代の遺構の可能性も考えられる。ただこれに関しては、周辺での調査成果を含め再検討を要する。

この他に調査地内からは直径0.2~0.3mの小ピットが数基確認されているが、S B07を除き建物としてのまとめは見いだせない。また出土遺物がないため時期なども不明である。



第17図 方形周溝墓 S X04北側周溝（東から）

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ2箱で、そのほとんどが弥生土器で占められる。次いで掘立柱建物S B02出土の長岡京期のもの、溝S D01出土の江戸時代のものであるが、出土量はわずかで、S B02では図示できたのは平瓦片のみである。弥生土器は方形周溝墓S X03が最も多く、次いで方形周溝墓S X04、落ち込みS X05、落ち込みS X06となる。

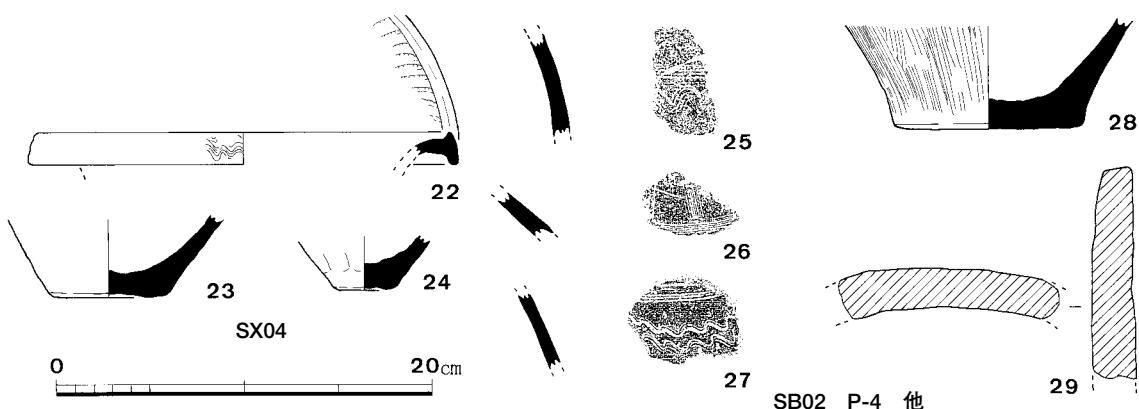
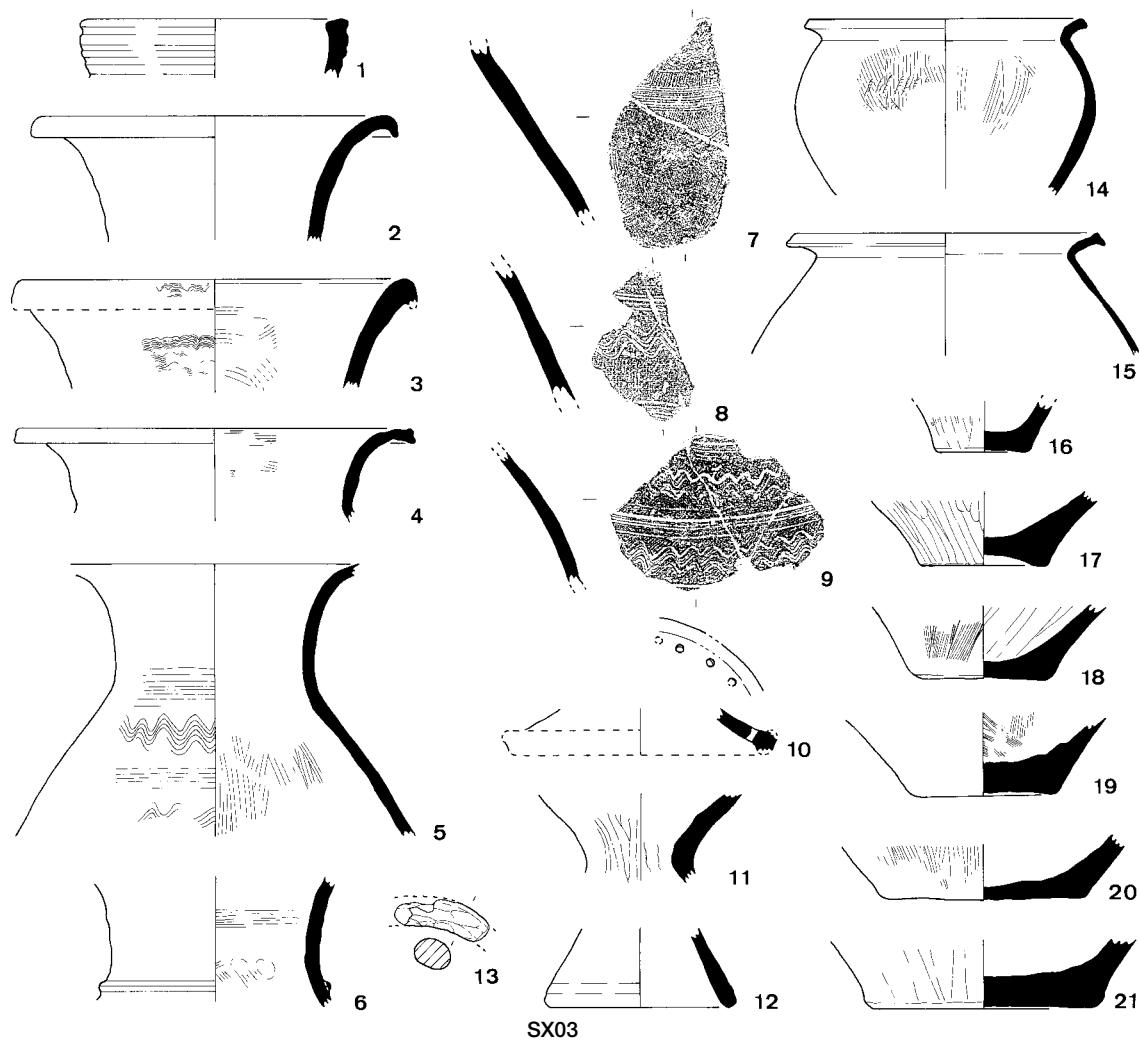
方形周溝墓S X03出土遺物 弥生時代中期後半の遺物群で、1は細頸壺の口縁部片である。器壁は厚く、口縁端部はやや内傾する平坦面を作る。口径14.4cmで、外面には4条の凹線文を巡らせてている。壺（2～6）は口縁部が外反しながら大きく開くもので、端部を垂下させるもの（2・3）と上下に拡張するもの（4）がある。2は口径19.4cm、摩滅が著しく調整などは看取できない。3は口径21.6cmで、口縁端部と外面に波状文を施し、内面は横方向のハケメが残る。4は口径20.8cmで、これも摩滅が著しいが内面には横方向のハケメがわずかに残る。5は口縁端部を欠いているが比較的良好な遺存状況を示す。外面は縦方向のハケメ調整の後ナデにより平滑にし、その後頸部以下に櫛描直線文と波状文を交互に施している。内面は頸部付近に絞り目が残り、頸部から口縁部はナデ調整、体部は縦方向のハケメ調整を行っている。頸部から口縁部の外面には煤が付着している。6は頸部に細い突帯を巡らせている。外面にはわずかに縦方向のハケメが、内面には横方向のハケメが残る。7～9は壺の体部片である。7は頸部から体部にかけての破片で、外面は細かい縦方向のハケメ調整の後、櫛描文を上から波状文、直線文、波状文、波状文の順で施している。内面は縦方向のナデ調整である。8は内面ナデ調整、外面はヘラミガキした後櫛描直線文と波状文を交互に施す。9は体部最大径付近の破片と見られ、内面は横方向のナデ、外面は斜方向のハケメの後やはり櫛描直線文と波状文を交互に施している。この個体も5と同様に外面に煤が付着している。

10～12は高杯または鉢の脚部と見られるものである。10は直径約14.0cmの大きく開く裾部で、端部は拡張させている。直径約0.4cmの円孔を1.7cm間隔で巡らせてている。摩滅が激しく調整は不明である。11は脚柱部片で、中空に作られており、内部には絞り痕と円形の粘土板で塞がれていた痕跡が残る。内面はナデ調整、外面は縦方向にヘラミガキしている。12は直径10.2cmに復元される摩滅が著しい小片で、一応脚部片としているが、細頸壺の可能性も考えられる。端部外面はわずかに凹んでいるが、凹線文とするには非常に浅く不明瞭なものである。

13は水差し形土器の把手部片と見られるもの。わずかに湾曲し、断面は橢円形を呈する。長径2.0cm、短径1.5cmで、摩滅が激しく調整は不明である。

14・15は甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は拡張して外傾面を作る。14は口径15.0cmで内外面は縦方向のハケメを施し、肩部付近にハケ原体によるとみられる刺突を綾杉状に施している。15は口径16.9cm。端部の拡張は14より大きく肩の張る器形である。摩滅が激しく調整は不明である。

16～21は底部片。底部径6.2cm～12.9cmで、底部を上げ底気味に作るもの（17）、外面ハケメ調



第18図 出土遺物実測図 (1/4)

整するもの（16・18・20）、ヘラミガキするもの（17・21）、内面ナデ調整するもの（16・17・20・21）、ヘラケズリするもの（18）、ハケメ調整するもの（19）がある。

方形周溝墓 S X04出土遺物 22は壺口縁部の破片。端部を上下に拡張し、外面には櫛描波状文を、口縁内面端部には櫛描弧状文を巡らせている。摩滅のため調整不明である。このほかに図示できなかったが、口縁端部を拡張させて、凹線を巡らせるものがある。25～27は体部片で、25は2条の櫛描直線文と1条の櫛描波状文が確認できる。摩滅のため調整は看取できない。26は内外面ナデ調整の後、外面に横方向の櫛描直線文と、それに直交する形で2条の縦方向の櫛描直線文を施すもの。おそらく等間隔で数条存在していたと見られるが、小片のため全体の文様構成は不明である。27は櫛描直線文と波状文の組合せで、櫛原体は中央が摩滅ないし欠損しているらしく、両端部のみ刻み込まれている。内外面ともナデ調整である。

23・24は底部で、23は底部径6.2cm、内面はナデ調整であるが外面は摩滅のため不明である。24は底部径3.3cm、内面及び底部はナデ調整、外面は縦方向のハケメを施す。

28はS X04上面の包含層から出土したもので、底部径は10.1cm、内面ナデ、外面は縦方向の粗いハケメで調整している。

掘立柱建物 S B02出土遺物 混入した弥生時代の遺物を除くと、P 4から平瓦片（29）、P 5からは須恵器杯B、平瓦片、P 6からは須恵器杯Bと蓋が出土している。29以外は非常に小片であり図示できなかった。唯一図示した平瓦も非常に摩滅しており、布目やタタキ痕も確認できないが、凹面の外縁部をヘラケズリしていることが看取される。

4 まとめ

今回の調査では当初の予想通り長岡京期の建物および弥生時代の方形周溝墓を検出したほか、時期的には検討の余地は残るもの、小規模な掘立柱建物も確認することができた。

今回検出された弥生時代の方形周溝墓のうち北側のS X03は、周溝の湾曲状況から見て南側に対となる周溝の検出が予想された。しかしながらそのような痕跡は見あたらず、別の方形周溝墓S X04が見つかったのみであった。南東部で行われた右京第654次調査では、直線的に掘られた溝を中心にそれに取り付くような形で方形周溝墓群が展開している様子が明らかとなっている。今回検出されたS X03はちょうど右京第654調査で検出された直線溝S D478の北西延長部に位置していることから（第28図）、S X03は直線溝の一部であり、同様に方形周溝墓が取り付いていた可能性が指摘できよう。

一方の方形周溝墓S X04は、部分的な検出ながらも周溝の方向がほぼ正方位に近いことが明らかとなった。南東部の右京第606・630・654次調査において検出された方形周溝墓群の方向は、大半が傾きを持つものであるが、この中で西側の一群のみほぼ正方位に近いことが判明している（第28図）。さらに傾きを持つ方形周溝墓の大半が畿内第Ⅲ様式に比定されるのに対し、西側の一群は畿内第Ⅳ様式に比定され時期的にも異なっている。今回検出されたS X04も出土遺物の時期および方向や位置から見てこの西側のグループに属するものと見られる。神足遺跡ではこれまで

の調査の蓄積により、居住区域の周囲に方形周溝墓を中心とする大規模な墓域が形成されていたことが明らかとなっており、規模の大小から階層的な差異も指摘されている。今回の結果は墓域の位置や方向などから造営時期の差を指摘することができるものであり、墓域形成過程を知る上でも貴重な成果と言えよう。

長岡京期では掘立柱建物 S B02が検出された。部分的ではあるがその検出は非常に重要である。すなわち当調査地は六条条間南小路推定地にあたり南北両側溝ともに調査地内を通る。しかしながら条坊側溝は検出されず、ちょうど南側溝の地点に掘立柱建物 S B02が存在していた（第27図）。このことは六条条間南小路が存在せず、右京六条二坊十一・十二町の南北2町域が使用されていたことの大きな根拠となる。右京第606・630・654次調査で検出された大規模な建物群は十一・十二町とともに同様な配置を持つことが明らかとなっていたため、十一・十二町の南北2町域使用の可能性が考えられた。しかし六条条間南小路推定部分では掘立柱建物、条坊側溝ともに存在しない空閑地となっていたため、明確にはできなかった。したがって今回六条条間南小路路面上で建物が検出されたことより、南北2町域の使用に関してはほぼ確定できたものと言えよう。

次に建物の規模と配置であるが、S B02の東側柱列は、南側の右京第606・630次調査で検出された小規模建物群の東側柱列とほぼ同一線上に並んでいる（第27図）。さらに建物の方向が北で西に傾く状況も一致しており、S B02は南側建物群と同一の規格内で配置された可能性は極めて高いといえる。その一方で細かな点で差異も認められる。南側の小規模建物とS B02は東西の柱間は2.4mと同じであるが、南北は南側の建物が2.1m、S B02では2.4mとやや大きい。さらに南側に廂を有している点なども異なっている。従ってS B02は同一規格内で配置されてはいるが、南側の小規模建物群とは性格を異にする施設だと言えるだろう。右京第606・630・654次調査では建物群の特徴のひとつとして、北西部に長大な東西棟建物（南北2間、東西10間）が2棟存在し、この一画が異なった機能を有する可能性が指摘されていた。今回検出された建物はこの2棟の長大な建物の北側に位置しており、この異なる機能を持った施設群に相当する可能性も考えられる。あるいは4町域のほぼ中心付近に位置することからみれば管理施設的な機能を持つとも考えられるが、現在のところは部分的な検出に過ぎないため確定はできない。今後の周辺での調査の経過を踏まえて改めて検討したい。

- 注 1) 岩崎 誠「長岡京跡右京第606次・神足遺跡発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第14集 1999年
- 2) 岩崎 誠・木村泰彦「右京第630次調査略報」『長岡京市センター年報』平成10年度 2000年
- 3) 岩崎 誠・木村泰彦「右京第654次調査略報」『長岡京市センター年報』平成11年度 2001年

第3章 長岡京跡右京第725次（7 A N M D B – 6 地区）調査概要

—右京六条一坊十一町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡—

長岡京駅西口地区市街地再開発事業に伴うC-15地区の調査

1 調査経過

調査は対象地内に土置場などを確保するため、対象地を南北に分割して行った。まず、11月19日より南トレンチの調査に着手し、11月29日に南トレンチの埋戻しと北トレンチの掘削を行っている。北トレンチでは長岡京期の大型柱掘形を検出したことに伴い、建物の範囲を追求するための拡張作業を行った。調査は12月17日に北トレンチの埋戻し作業を行って完全に終了している。前述のように調査は南トレンチ、北トレンチの順に行ったが、本文ではとくに断らない限り南北トレンチを一つのものとして扱っている。現地表面の標高は20.7m前後を測り、調査面積は96m²、調査区の中心は第VI座標系のY=-27,208、X=-119,796に位置する。

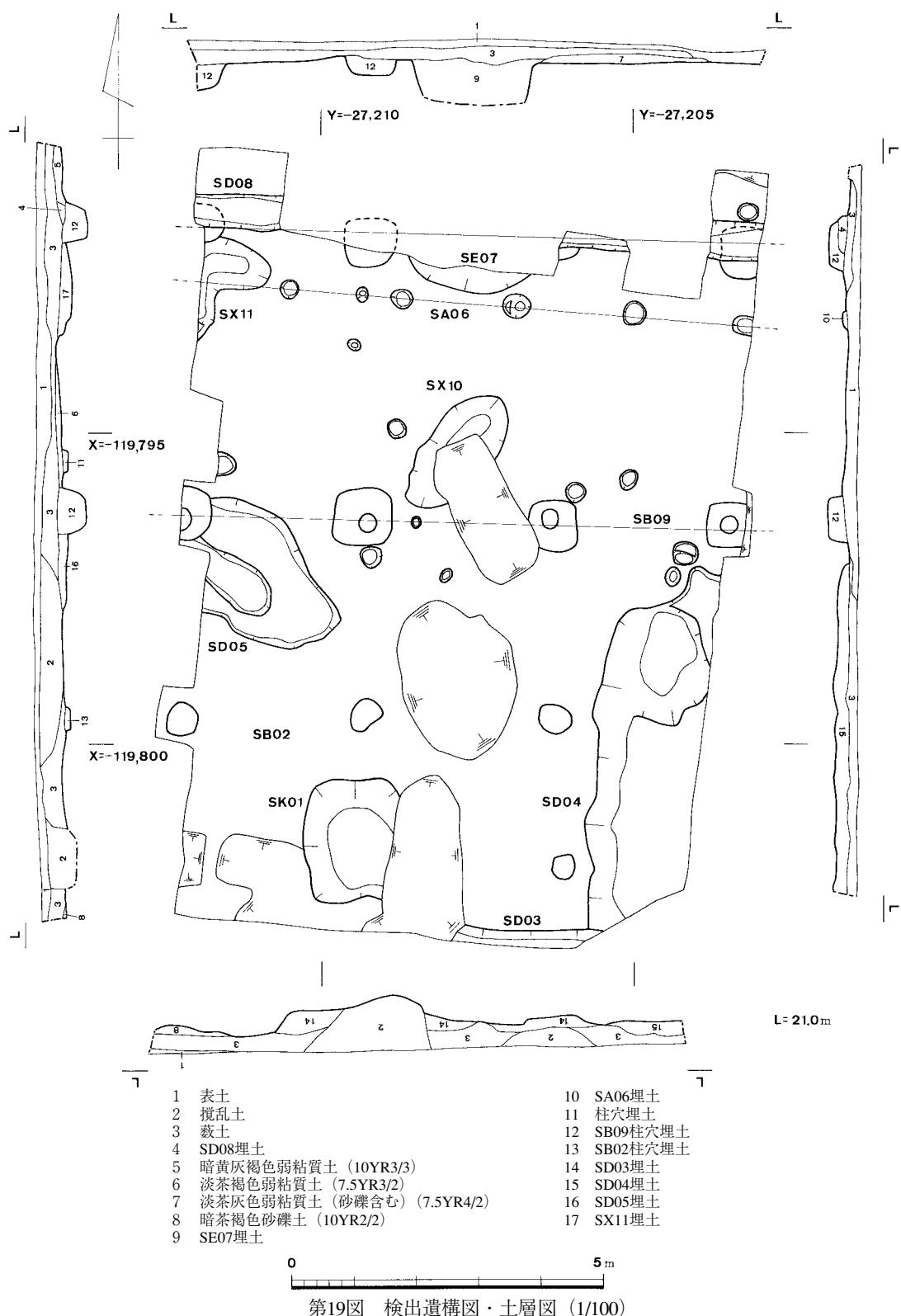
2 検出遺構

調査地東側の住友ペークライト跡地にはかつて尋常小学校があり、校舎が室戸台風によって被害を被り現在の神足小学校へ移転したあと、全域がペークライトの敷地となった。調査対象地は現在空き地であるが以前は住宅として利用されていた。住宅は昭和30年代に南北道路を隔てた住友ペークライト敷地から移設されたもので、それ以前は畠地であったらしい。また、住友ペークライト跡地内に尋常小学校が置かれていた時期には、当地周辺は孟宗竹の鬱蒼とした竹藪で、跡地とを隔てる南北道路も現在の道幅の半分程度、1m幅の小径であったという。このように、当地の土地利用は昭和以降でも、竹藪、畠地、民家、そして空き地への変遷を辿ることができる。調査区で確認した厚さ0.2m前後の表土（第19図第1層）と調査区内に穿たれた搅乱坑（第2層）は民家の移設と解体に伴うものと考えられる。また、第3層は厚さ0.3m前後で、その土質は藪土に似ているが、先述した竹藪、畠地の明瞭な差は窺えなかった。第3層直下には明黄褐色砂礫土の地山が現れるが、調査区の北半では部分的に暗黄灰褐色弱粘質土（第5層）、淡茶褐色弱粘質土（第6層）、淡茶灰色弱粘質土（第7層）が認められた。第5～7層の形成過程は明らかでなく、地山（明黄褐色砂礫土）との関連は分からず。明黄褐色砂礫土の上面が遺構検出面であり、その高さは標高20.3～20.5mで南西方向へ緩やかに傾斜していた。

（1）江戸時代の遺構

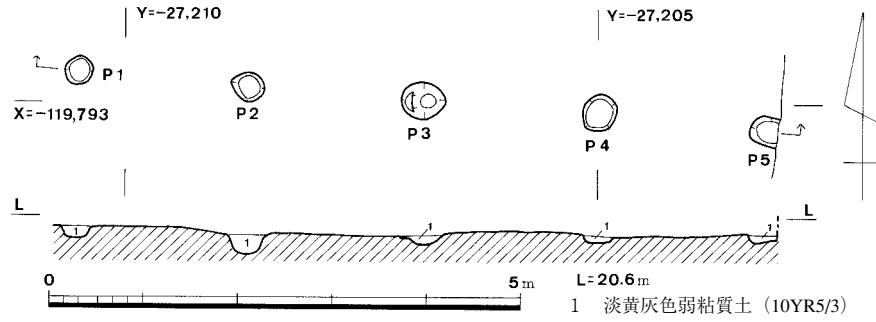
東西溝1条、柵1条、井戸1基、土坑1基、柱穴4基を確認した。

溝S D08（第19図）　掘立柱建物S B09の北柱列を追求するために設けた拡張区で確認した東西溝で、幅0.5m前後、深さ0.1～0.3mを測る。溝S D08は後述する井戸S E07の輪郭を切って掘削されている。出土遺物には土師器の小片が認められるだけであったが、埋土が第2層と類似するために近世以降の竹藪地境溝と考えた。

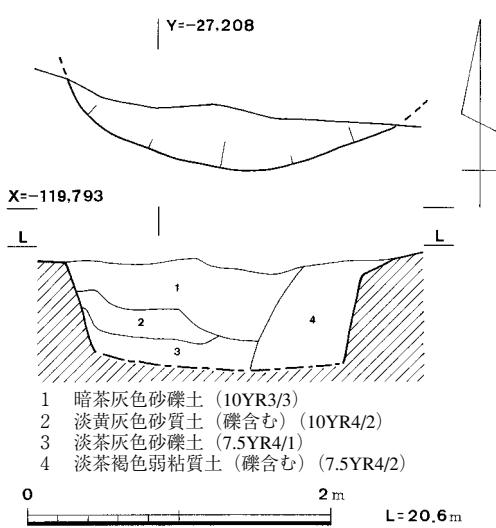


第19図 検出遺構図・土層図 (1/100)

柵SA06（第20図） 調査区の北辺で確認した東西方向の柵で、さらに調査区より東西へ続いている。柱当たりは確認されなかったが、柱掘形の位置関係から柵SA06の柱間は1.8m等間と考えられる。柵は西に対して北へ5°振っており、各柱掘形は直径0.3m前後、深さ0.2~0.4mを測る。埋土は第2層に似た淡黄灰色弱粘質土で、遺物は僅かに土師器片が出土ただけであった。



第20図 柵 S A06実測図 (1/80)



第21図 井戸 S E07実測図 (1/50)

井戸 S E07 (第21図) 調査区北辺の中央部で検出した円形の井戸と考えられるが、さらに北側へ続いたため全容を明らかにできなかった。調査区内で確認した東西幅が2mを測ることから、井戸の平面規模は直径3mに達するものと考えられる。調査では深さ約1mまで掘削したが、範囲が狭小になったため以下の掘削を断念している。また、井戸側の有無についても明らかにできなかった。埋土には第2層に似た淡茶褐色粘質土などが堆積しており、遺物は弥生土器とともに江戸時代頃と考えられる土師器片が出土している。

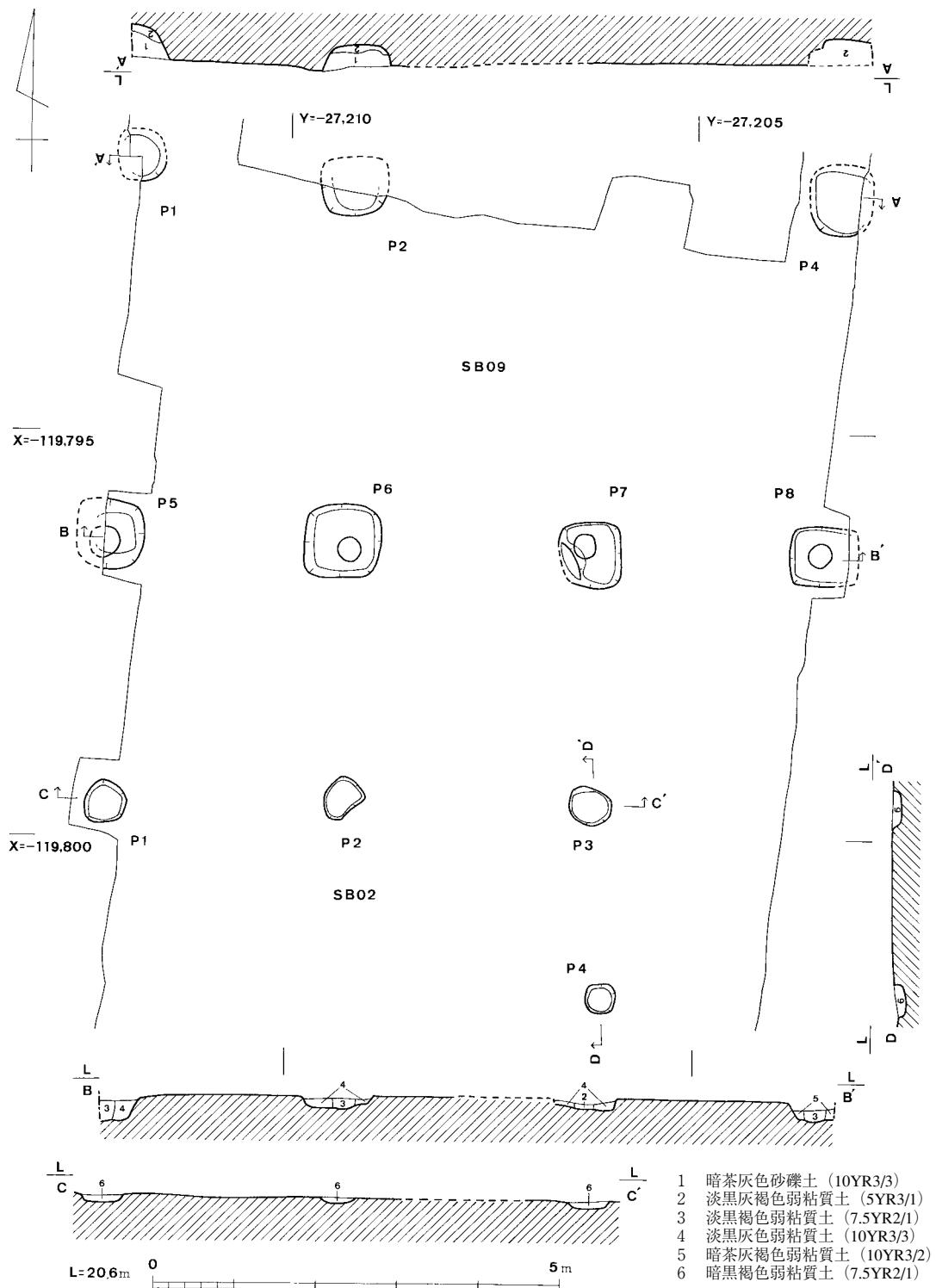
土坑 S K01 (第19図) 調査区の南辺中央部で確

認した橢円形を呈する土坑で、部分的に搅乱坑によって遺構の輪郭が失われている。土坑は長軸約2m、深さ0.5m前後を測る。埋土には藪土に似た茶褐色土が堆積しており、また、埋土の上部には拳大の円礫が多く含まれていた。出土遺物は少ないが、近世頃と考えられる土師器が含まれていた。

(2) 長岡京期の遺構

掘立柱建物2棟、東西溝1条、柱穴7基を確認した。掘立柱建物は2棟が南北に並ぶ状況を想定したが、南側の柱掘形については北側の掘立柱建物の廻、ないしは、遮蔽施設としての柵の可能性も考えられる。

掘立柱建物S B09 (第22図) 掘立柱建物S B09は調査区の北半部で確認した。当初、一辺が1m近い大型の柱掘形3基を検出したため、調査区を随时拡張して全容の把握に努めた。その結果、掘立柱建物S B09は梁間2間、桁行5間以上の東西棟で、さらに調査区の東西へ続くことが明らかとなった。建物の柱筋は正方位ではなく、真北からやや東へ振っている。柱掘形はいずれも隅円方形であるが、その規模には一辺が0.6~0.9m、深さ0.2~0.4mのものがある。また、南側の柱筋では直径0.3m前後の柱痕跡を確認している。柱間は梁間が2.4m、桁行方向が3mに揃っている。出土遺物は後述する掘立柱建物S B02に比べて多く、とくに柱穴P 1・4・5・8からは土師器、須恵器、瓦、製塙土器、土馬などが出土している。なお、柱穴P 3は江戸時代の井戸S



第22図 掘立柱建物 SB02・09実測図 (1/80)

E07と重複する位置に推定され、検出することができなかった。

掘立柱建物 SB02 (第22図) 掘立柱建物 SB02は調査区の南半部で確認した。調査区内では柱穴4基を検出し、南北1間以上、東西2間以上の規模が想定できるが、建物の棟方向を明らかにすることはできなかった。建物の方向は掘立柱建物 SB09と同じで、真北からやや東へ振っている。柱掘形はいずれも一辺0.5m程度の隅円方形で、深さ0.1~0.3mであった。柱間は南北方向

2.4m、東西方向3mを測る。柱穴P1からは土師器皿Cが、柱穴P4からは平瓦が出土しているが、出土遺物の量は多くない。

溝S D03（第19図） 調査区の南縁部で確認した東西溝で、西側は搅乱坑、土坑SK01によつて失われている。しかし、検出した地山面の高さなどから、溝SD03は調査区内で収束するか、ないしは、南方へ屈曲するものと考えられる。溝は南肩を確認していないため、その規模を明らかにすることはできなかったが、深さは0.2~0.4m程度と考えられる。埋土には掘立柱建物SB02と類似した黒褐色土が堆積していたが、出土遺物に須恵器が含まれない点、掘立柱建物SB02と重複する点など、その時期を含めて再検討を要する。

（3）弥生時代前後の遺構

おもに調査区の南半部で弥生時代の遺物を含む遺構を確認した。

溝S D04（第19図） 調査区の東辺で確認した南北溝で、東西方向の幅1.8m以上、深さ0.2m前後を測る。調査区の中央部より北には続かないが、この場所で途切れるのか、東方へ屈曲しているのかは明らかでない。溝西肩の輪郭には出入りがあるものの、おおよそ北に対して5°東へ振る方向であった。出土遺物には弥生時代中期の壺、甕があり、方形周溝墓の周溝である可能性が高い。遺物は溝埋土の上部に多く含まれていたが、溝底部付近にはほとんど含まれていなかった。

溝S D05（第19図） 調査区中央の西辺で確認した溝で、北西から南東方向に掘削されており、南東部は調査区内で収束している。溝の幅は1.5m前後で、深さは0.2mに満たない。溝埋土の特徴は溝SD04と類似しており、また、出土遺物も同様のものがある。

土坑SX10（第19図） 調査区北部の中央で確認した楕円形を呈する土坑。北東から南西方向の長軸が2.2m、幅1.1mで、深さ0.3m前後を測る。土坑SX10の埋土は弥生時代の溝SD04・05に類似しているが、遺物が全く出土しておらず、遺構の輪郭も不明瞭なことから、自然的な作用によって形成されたものと考えられる。

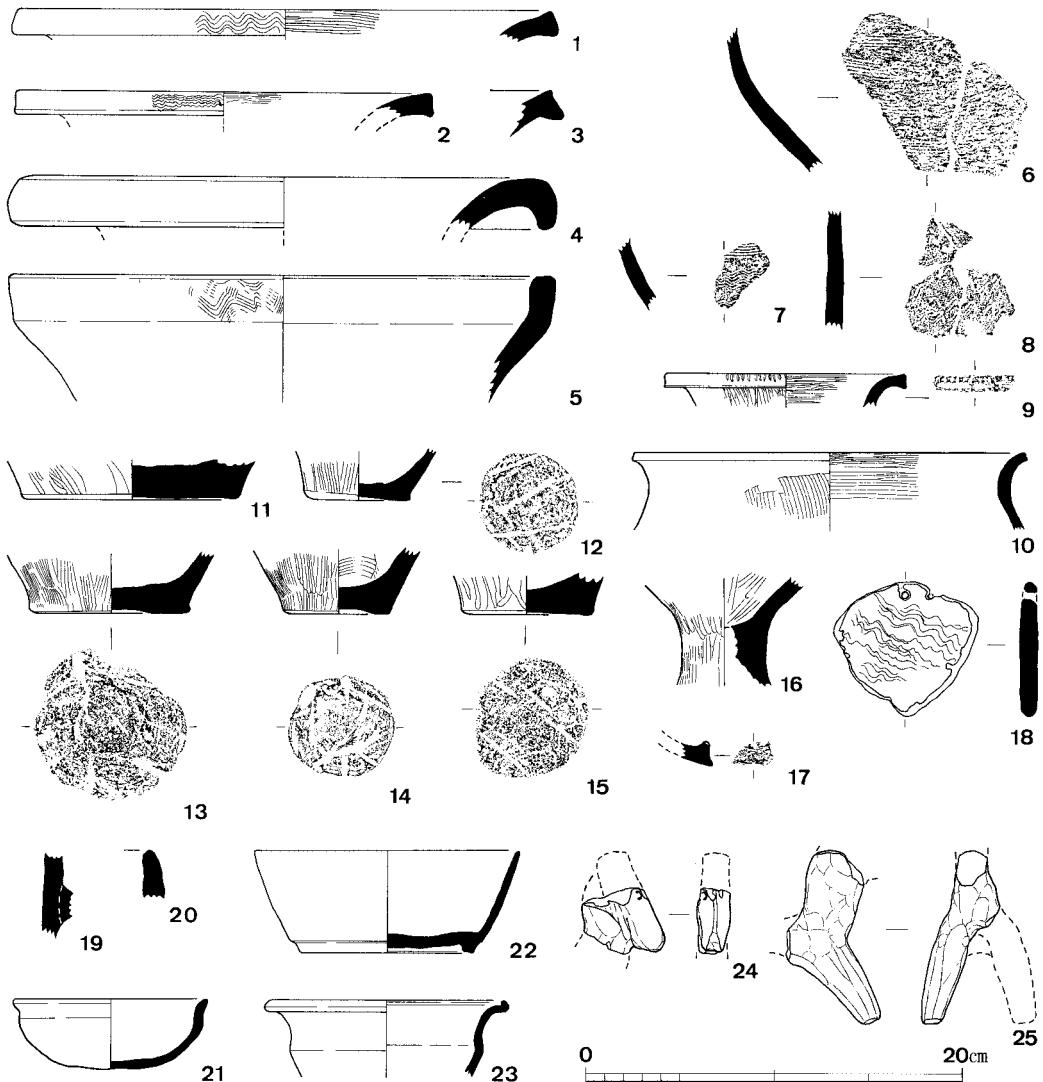
土坑SX11（第19図） 調査区の北西隅で確認した不整形な土坑で、南北方向の長さ1.7m、深さ0.2m前後を測る。土坑SX11についても遺物が出土していないことなどから、土坑SX10と同様な性格のものと考えられる。

3 出土遺物

出土遺物には弥生時代、長岡京期、中世、江戸時代のものがあり、その量は整理箱にして3箱であった。出土遺物の大部分は接合が困難な破片であり、個体数や口縁部の残存度を基準にした分析は行えない。破片数では壺、甕を中心とした弥生時代の遺物が全体の8割近くを占め、次いで長岡京期のものが2割弱であった。また、弥生土器壺、甕の破片数は口縁部片と底部片が拮抗しており、溝SD04・05をはじめ本調査区における遺構面の削平が顕著であったことを示している。（第23・24図、付表一5）。

（1）中世以降の遺物

中世の土師器小皿・羽釜（19）、近世の土師器・陶磁器・石硯が出土しているが、遺物量が非常



第23図 出土遺物実測図 (1/4)

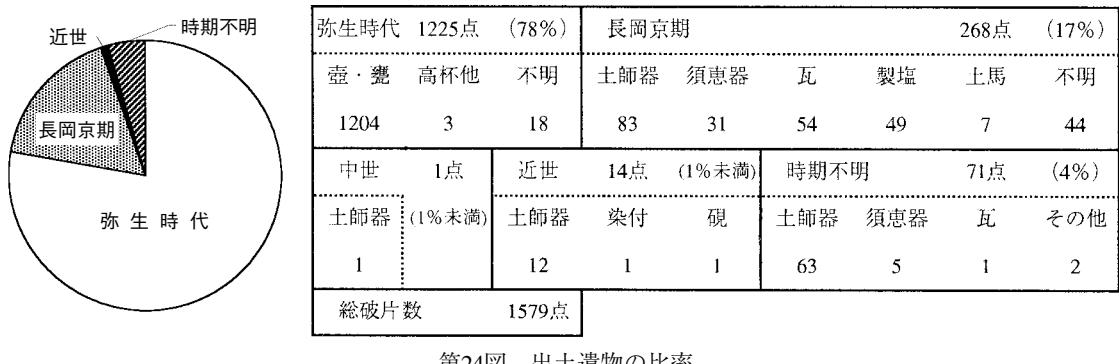
に少なく、また、いずれも細片であった。

(2) 長岡京期の遺物

土師器に杯A・皿A・椀・甕・壺C（21）、須恵器には杯B（22）・杯B蓋・壺H（23）・甕があり、この他に瓦・製塩土器（20）・土馬（24・25）が出土している。破片数では平瓦・丸瓦の占める割合が比較的高い。21の土師器壺Cはほぼ完形に復元できるもので、掘立柱建物S B 02の柱穴P 1より出土した。口径10.4cm、器高3.8cmを測り、体部以下が未調整で口縁部は強いナデ調整によって外反している。22の須恵器杯Bは口径14cm、器高5.5cm、23の壺Hは口径13cmを測る。平瓦・製塩土器・土馬は主に掘立柱建物S B 09の柱穴P 4～6・8から出土した。

(3) 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は溝S D04・05の他、長岡京期の掘立柱建物柱穴など後世の遺構や搅乱坑からも出土している。弥生土器には広口壺（1～8）・甕（9・10）、壺ないし甕底部（11～15）、高杯（16）がある。また、細片であるが17は高杯ないし器台の裾部、18は蓋と考えられる。壺、甕や高杯の形態などから、これらの遺物には弥生時代中期後半の時期を想定できる。



第24図 出土遺物の比率

付表－5 弥生土器壺・甕の種別破片数

口縁部片	底部片	体部文様				体部の調整					
		直線文	直線文 波状文	波状文	波状文 凸帯	外面	ハケ	ハケ	ミガキ	ミガキ	タタキ
49	43										
頸部片	部位不明	直線文	直線文 波状文	波状文	波状文 凸帯	外面	ハケ	ハケ	ミガキ	ミガキ	タタキ
17	261	18	3	9	1	内面	ナデ	ハケ	ナデ	ハケ	ナデ
体部片		底部の形態				底部の調整					
834		平底	窪み底	不明		外面	ハケ	ミガキ	ハケ		
総破片数		15	13	15		内面	ナデ	ナデ	ハケ/ナデ		
1204							14	6	3		

広口壺には口縁部が外反するもの（1～4）と、直立した口縁部が受け口状を呈するもの（5）がある。文様は口縁部に波状文（1・2・5）が多用され、体部では直線文と波状文の組み合わせ（7）が目立つが、口縁部、体部とともに凹線文、列点文などは確認できなかった。甕では口縁上端部に刻み目を施すもの（9）が認められた。壺ないし甕の底部には平底（11・15）と窪み底（12～14）がほぼ同量認められる。ただし、全体の復元が困難であるため壺・甕の別や器形、調整手法などとの関連は明らかにできなかった。壺および甕の調整手法は、内面にナデ調整を施すものが多い。また、僅かではあるが外面にタタキメを残すものも認められる。

高杯（16）は杯部から柱状部にかけての破片であり、外面と杯部内面には粗いヘラミガキが施されている。壺蓋（18）と考えられる破片には2個1対の小さな穴が穿たれており、外面には粗い波状文が施されている。

4 まとめ

調査では弥生時代、長岡京期、江戸時代の遺構を確認した。しかし、調査面積の狭小さなどから、個別遺構の理解や全体像を把握するうえで、重要な課題を多く残す結果となった。

弥生時代では中期の方形周溝墓と考えられる溝から多くの遺物が出土している。神足遺跡では現在のJR長岡京駅周辺に集落の居住域があり、方形周溝墓群が居住域を取り囲む集落像が想定されていた。^(注1)しかし、右京第606次調査地などの南方調査区では少数ながらも竪穴住居が確認され、衛星的な小規模居住域の存在など、より複雑な集落構造を想定する必要も生じている。本調査の結果、前述の調査地北半部で確認された方形周溝墓や溝群が、当地まで展開する状況が明らかとなった。しかし、確認したのは溝の一部で方形周溝墓の形態や規模を推測するための材料は全く

得られておらず、出土した弥生土器も器壁面の保存状態が芳しくなく、全形を復元し得ない破片である。また、方形周溝墓や溝群との具体的な関連は定かでなく、当地より北西における方形周溝墓群の展開ないし収束を検討し得る材料も見当たらない。右京第606・630・654次調査は神足遺跡の南西部を解明する上での定点的な調査地であり、その隣接地という観点からも当地の調査成果は物足りない内容であった（第28図）。

長岡京期では掘立柱建物2棟、東西溝1条などを確認し、右京第606・630・654次調査⁽²⁾で確認された大規模な建物群が当地まで及ぶことを確認した。さらに、掘立柱建物SB09が東西棟であることは、これまでに確認されていた掘立柱建物27棟と同じであり、建物群の強い規格性を改めて示す結果となった。ただ、掘立柱建物SB09の桁行3m、梁間2.4mという規模は、建物群内でこれまでに確認されていなかったタイプであり、東西棟を基本としながらも様々なタイプの掘立柱建物が配されていたことを推測させる。十一・十二町の建物群は北西に傾きながらも梁を南北に揃えて配置されているが、掘立柱建物SB02・09の配置と全体の配置規格との整合性については、今後の周辺調査を待って再検討しなければならない。また、現在確認されている建物群には南北方向のやや広い空閑地を隔てて、東西2つの群が認められる。東側の群が小規模な柱掘形の梁間2間、桁行5間の掘立柱建物でほぼ統一されるのに対し、西側の群には大型の柱掘形を持つ梁間2間、桁行10間の長大な掘立柱建物が2棟存在する。当地は西側の群に含まれ、長大な掘立柱建物と今回検出した掘立柱建物SB09の関連が注目される。建物群が十一～十四町の四町を占有する場合、当地周辺はその中央部付近に当たることから、中心的な施設の存在なども想定した検討が必要と考えられる（第27図）。

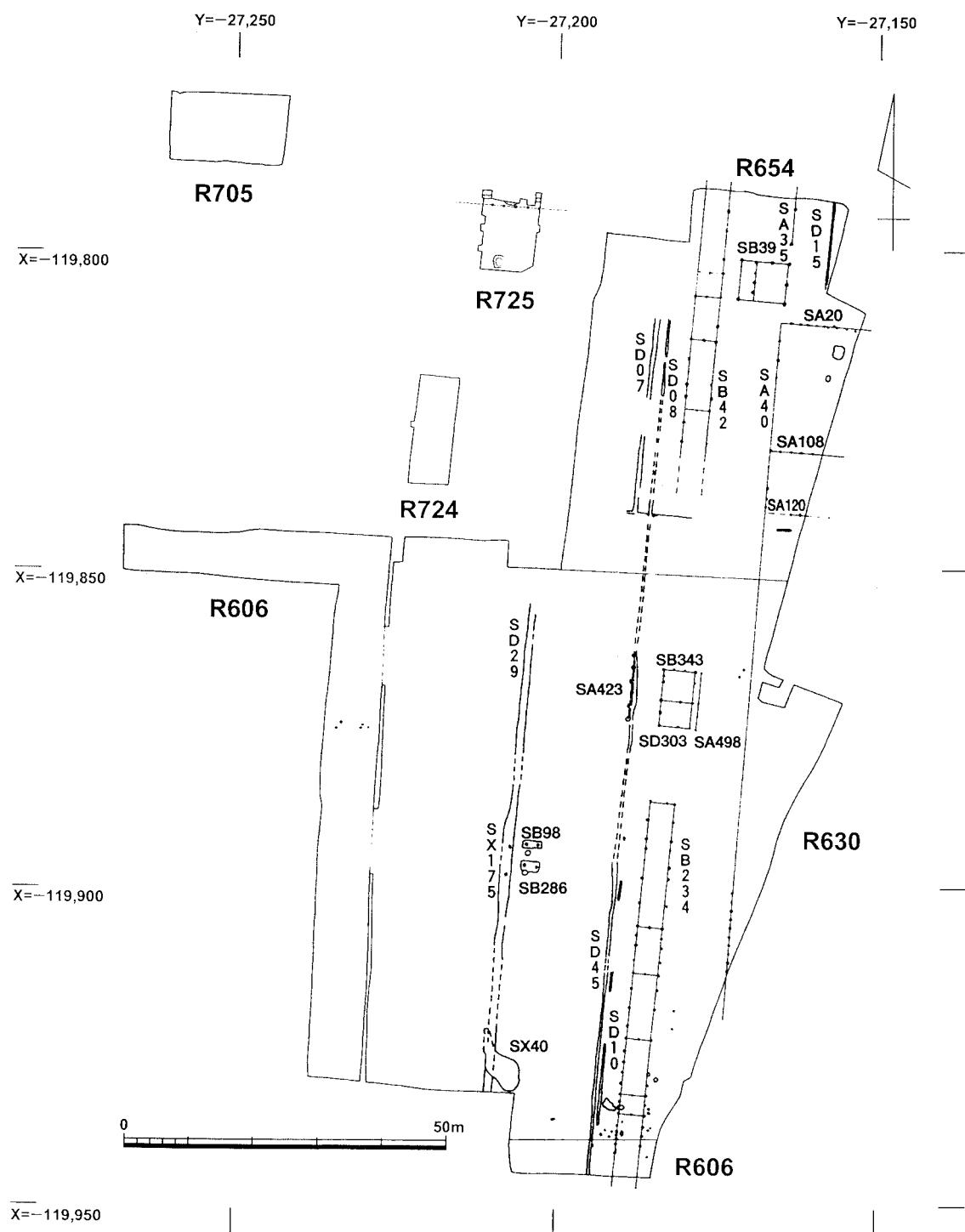
江戸時代の遺構は詳細な時期が明らかでなく、江戸時代初頭の近世勝龍寺城跡に伴うものかは分からぬ。『永井直清公御在所城州神足之図』と周辺の調査成果からは、東側の南北道路に城の外周を巡る堀と土塁が予想され、当地は城外にあたるものと考えられる。また、絵図には西国街道と城を繋ぐ2箇所の口が描かれているが、当地は京口、茶屋口の間に相当し特別な施設も予想できない。他方、西国街道沿いの町屋との関連を考えるには、街道から約60m離れた場所に柵、井戸が設けられた状況が問題となるだろう。いずれにせよ、本調査で検出した江戸時代の遺構は、今後の周辺調査による近世勝龍寺城跡周辺や西国街道沿いの資料の蓄積を待って再評価しなければならない（第25図）。

注1) 岩崎 誠「四 弥生時代」『長岡京市史』資料編一 1991年

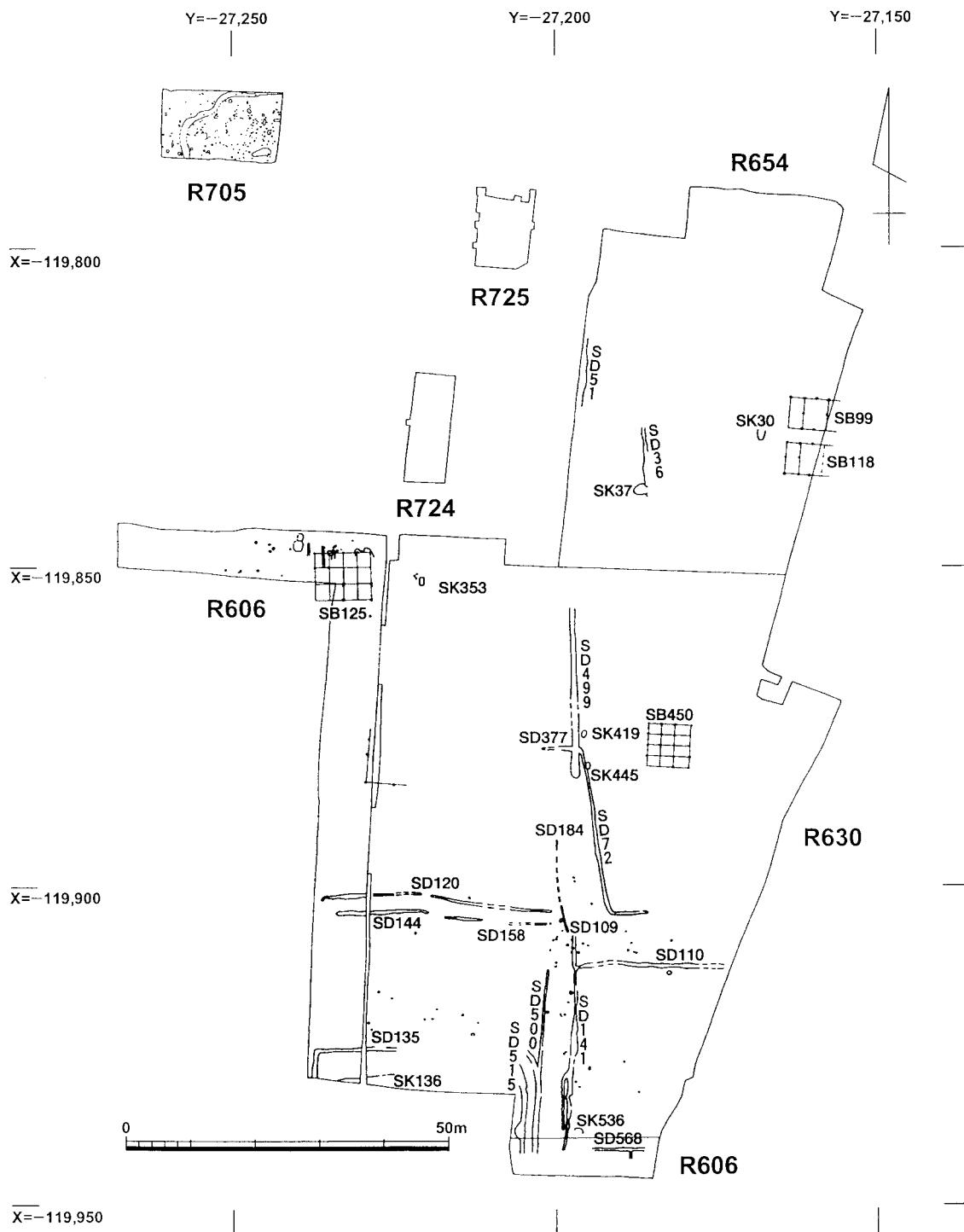
2) 岩崎 誠『長岡京跡右京第606次・神足遺跡発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第14集 1999年

岩崎 誠・木村泰彦「右京第630次調査略報」『長岡京市センタ一年報』平成10年度 2000年

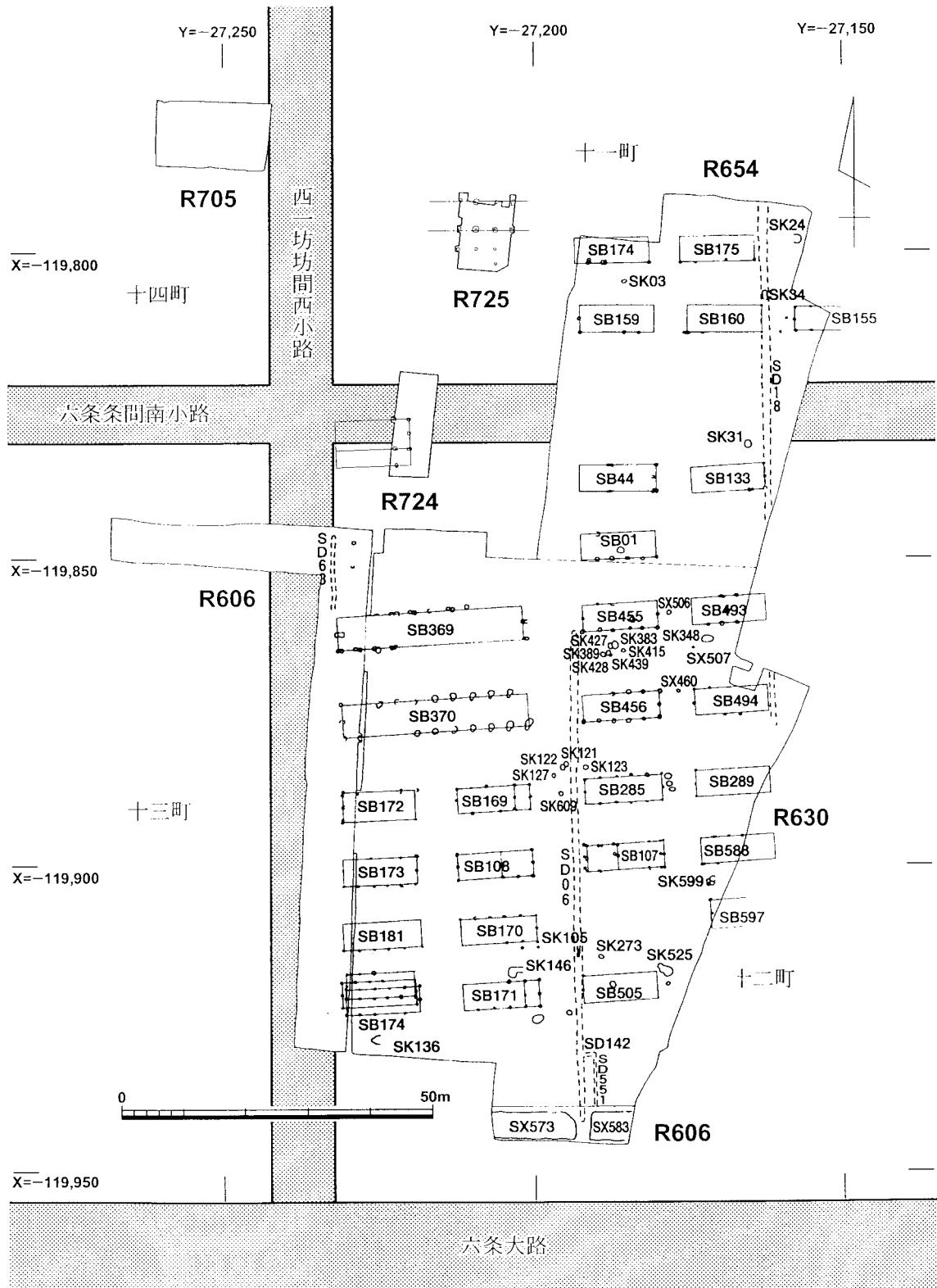
岩崎 誠・木村泰彦「右京第654次調査略報」『長岡京市センタ一年報』平成11年度 2001年



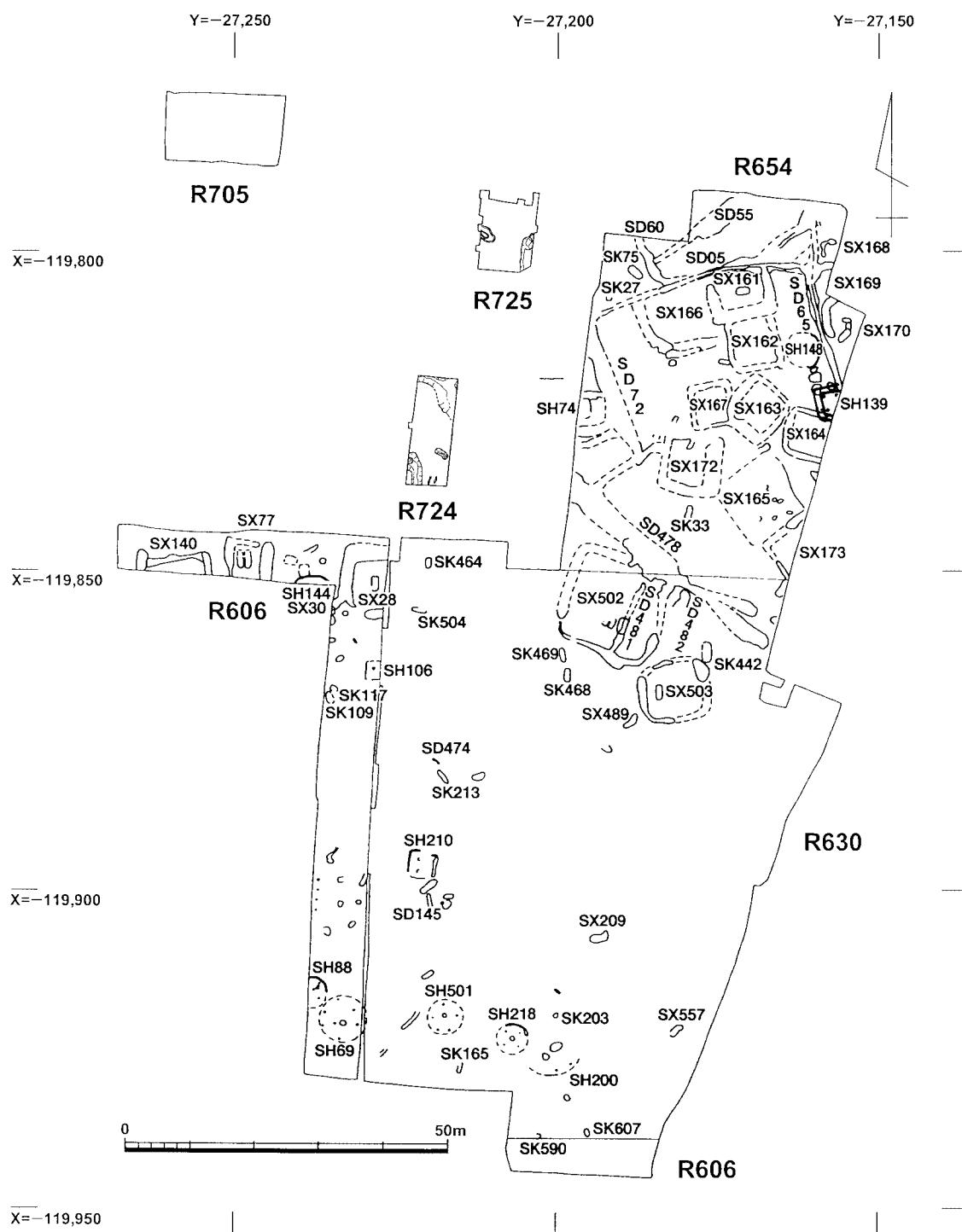
第25図 周辺調査地遺構図－江戸時代－（1/1000）



第26図 周辺調査地遺構図－鎌倉時代－（1/1000）



第27図 周辺調査地遺構図－長岡京期－（1/1000）



第28図 周辺調査地遺構図－弥生時代－（1/1000）

付表-6 調査抄録

ふりがな	ながおかきょうしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第25集
編著者名	岩崎 誠・木村 泰彦・中島 皆夫
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡(右京第705次) こうたりいせき 神足遺跡 きんせいしおりゆうじょうあと 近世勝龍寺城跡	ながおかきょうしきうたり 長岡京市神足 二丁目地内	26209	107	34° 55' 11"	135° 42' 06"	20011210 ↓ 20020122	209m ²	長岡京駅前 再開発事業
			83					
			84-2					
ながおかきょうあと 長岡京跡(右京第724次) こうたりいせき 神足遺跡 きんせいしおりゆうじょうあと 近世勝龍寺城跡	ながおかきょうしきうたり 長岡京市神足 二丁目地内	26209	107	34° 55' 10"	135° 42' 08"	20011112 ↓ 20011204	107m ²	長岡京駅前 再開発事業
			83					
			84-2					
ながおかきょうあと 長岡京跡(右京第725次) こうたりいせき 神足遺跡 きんせいしおりゆうじょうあと 近世勝龍寺城跡	ながおかきょうしきうたり 長岡京市神足 二丁目地内	26209	107	34° 55' 11"	135° 42' 08"	20011119 ↓ 20011217	96m ²	長岡京駅前 再開発事業
			83					
			84-2					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡(右京第705次) 神足遺跡 近世勝龍寺城跡	都城跡 集落跡 城館跡	長岡京期	柱穴	須恵器、土師器	鎌倉時代の土坑出土遺物は一括性が高い。
		弥生時代	土坑	弥生土器	室町時代の溝から多量の土師器皿が出土。
		鎌倉時代	柱穴、土坑	土師器、瓦器、陶磁器	江戸時代井戸出土の青銅製仏像は非常に希少。
		室町時代		須恵器、綠釉陶器	近・現代の遺構出土遺物に墨書き土器や鍛冶関連遺物がある。
		平安時代	井戸	土師器、陶磁器、青銅製仏像	
長岡京跡(右京第724次) 神足遺跡	都城跡 集落跡	長岡京期	掘立柱建物	須恵器、土師器、瓦	建物は六条条間南小路の路面上に位置する。
		弥生時代	方形周溝墓、土坑	弥生土器	
		鎌倉時代	掘立柱建物		
長岡京跡(右京第725次) 神足遺跡 近世勝龍寺城跡	都城跡 集落跡 城館跡	長岡京期	掘立柱建物、溝、柱穴	土師器、須恵器、製塩土器、土馬	一棟は一辺1mの柱掘形を持つ。
		弥生時代	溝	弥生土器	
		鎌倉時代		土師器	
				土師器、陶磁器	

図 版

長岡京跡右京第705・724・725次調査

図版一



(1) 調査地周辺航空写真（1987年4月 南から）



(2) 調査地周辺航空写真（1999年12月 西から）

長岡京跡右京第705次調査

図版二



完掘状況全景（南東から）

長岡京跡右京第705次調査

図版
三



(1) 近世以後の遺構全景（西から）



(2) 完掘状況全景（南西から）

長岡京跡右京第705次調査

図版四



(1) 溝 S D13 (南西から)



(2) 溝 S D13 (2 C区) 磯出土状況 (南西から)

長岡京跡右京第705次調査

図版五



(1) 溝S D13 (C 2区) A・B区分岐部遺物出土状況 (北西から)



(2) 溝S D13北部 (1 B区) 遺物出土状況 (北東から)

長岡京跡右京第705次調査

図版六



(1) 溝 S D13北部（1B区）土師器皿集積状況（南東から）



(2) 土坑 S K52断面（西から）



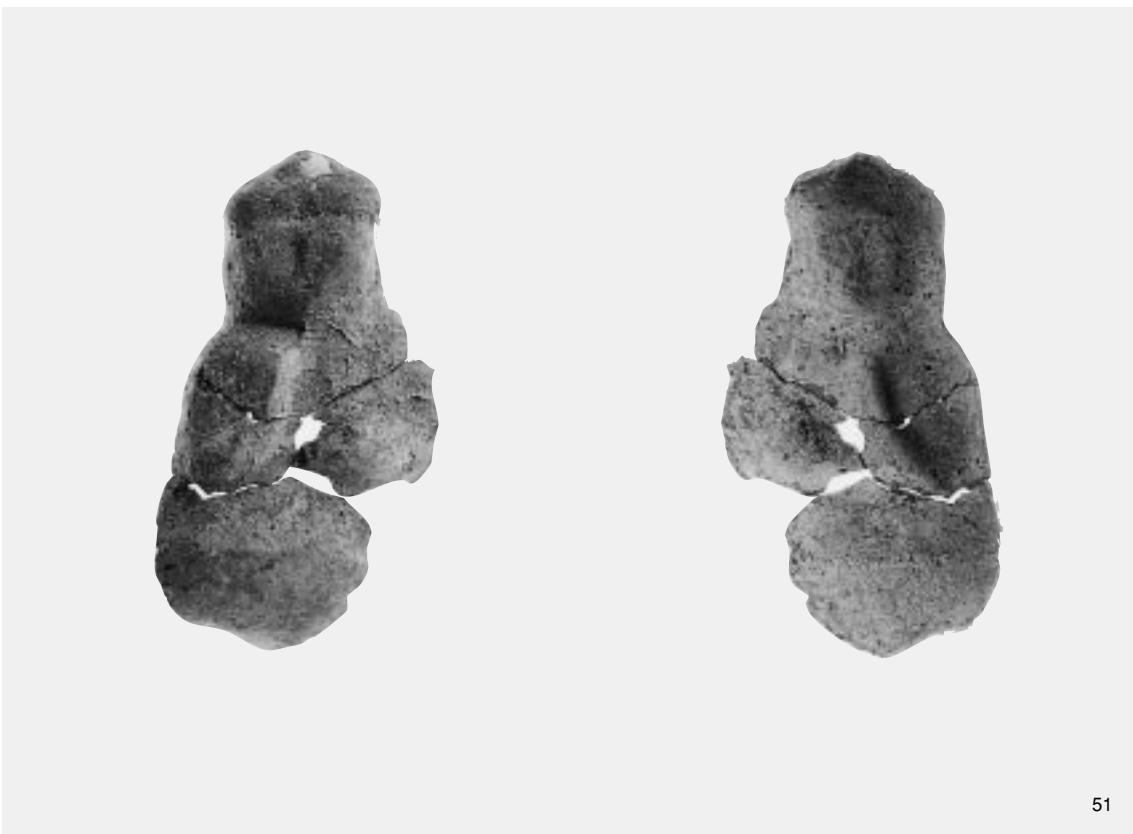
(4) 土坑 S K54瓦器碗出土状況（西から）



(3) 土坑 S K52礫出土状況（西から）



(5) 土坑 S K54断面（西から）



51

(1) 井戸 S E45出土青銅製仏像



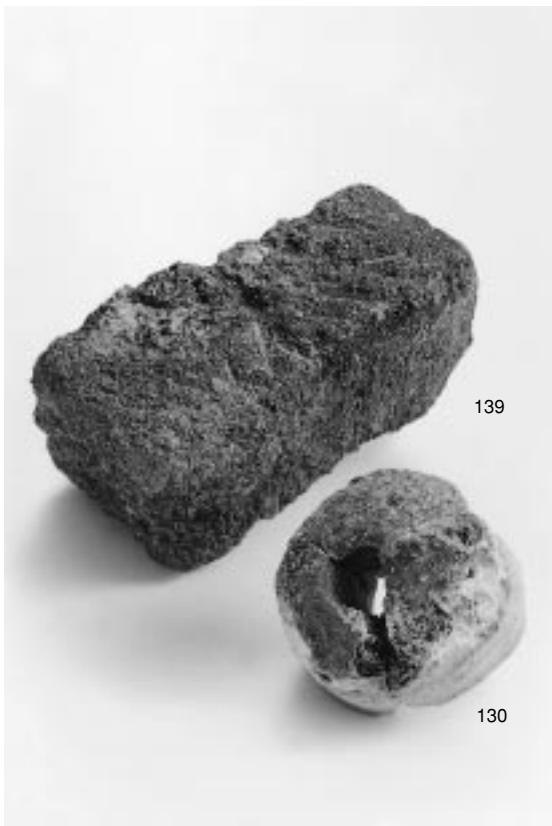
(2) 溝 S D13出土一括遺物

長岡京跡右京第705次調査

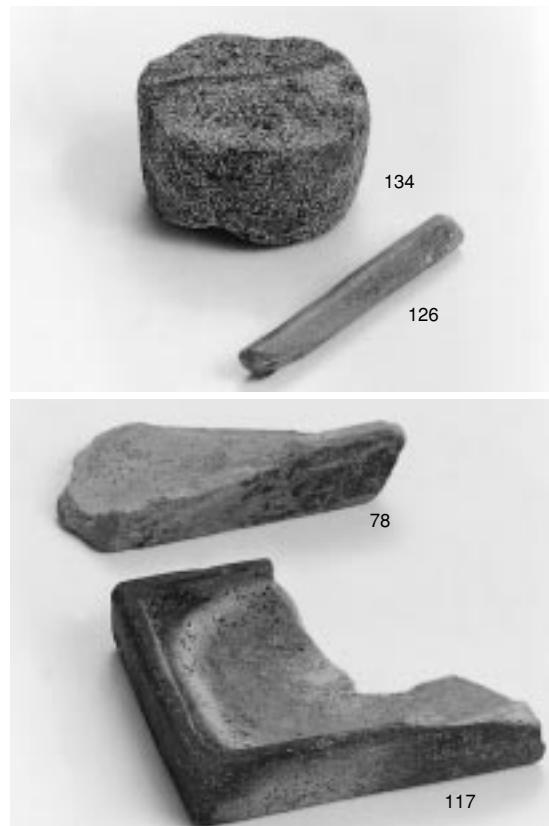
図版八



(1) 土坑S K54出土一括遺物



(2) フイゴと鋳型



(3) 上・石製品、下・硯

長岡京跡右京第705次調査

図版九

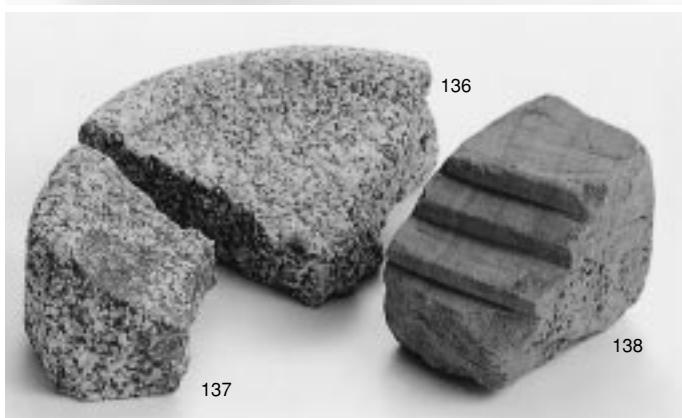


128



125

(2) 陶製筒形容器



136

138

(1) 上・丸瓦、下・石臼と階段状石製品



105

(3) 溝 S D 13出土鉄製品



124

79

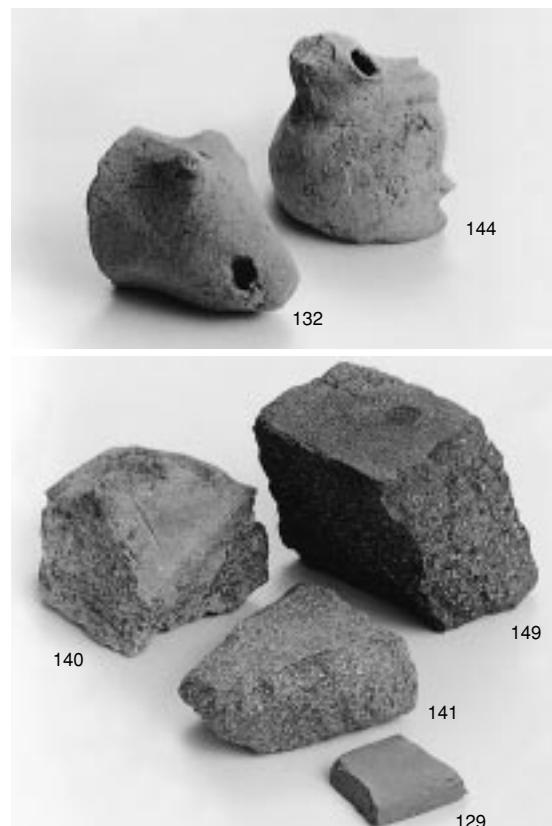
135

143

111

131

(4) 軒瓦類



144

132

140

149

141

129

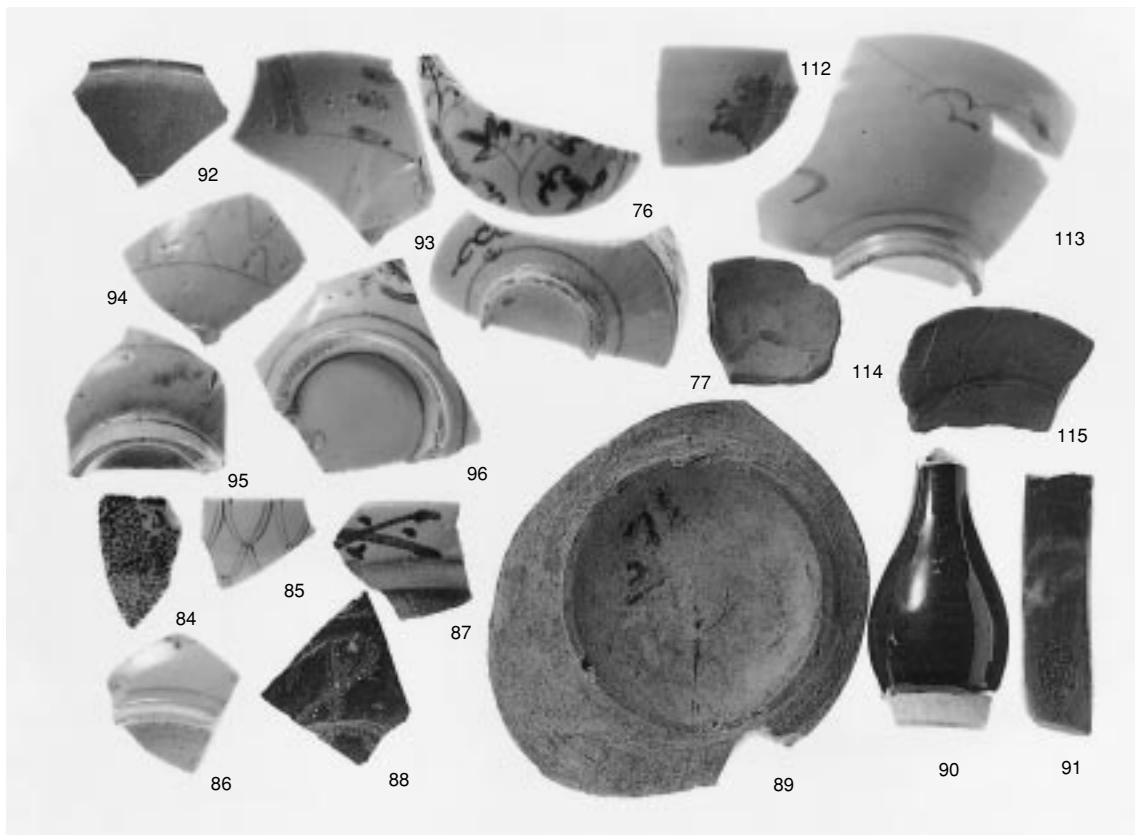
(5) 上・土製品、下・砥石

長岡京跡右京第705次調査

図版一〇



(1) 土坑S X02出土陶磁器



(2) 井戸S E10・45・48、土坑S X37出土陶磁器等

長岡京跡右京第705次調査

図版
一



82



(1) 土坑S X02出土墨書磁器



127



118

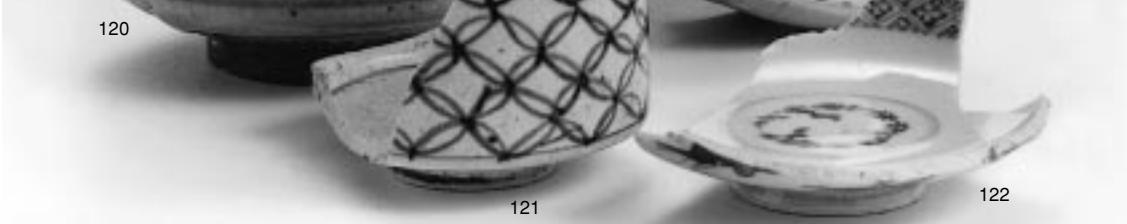


116

(2) 土坑S X09・11・40出土磁器



119

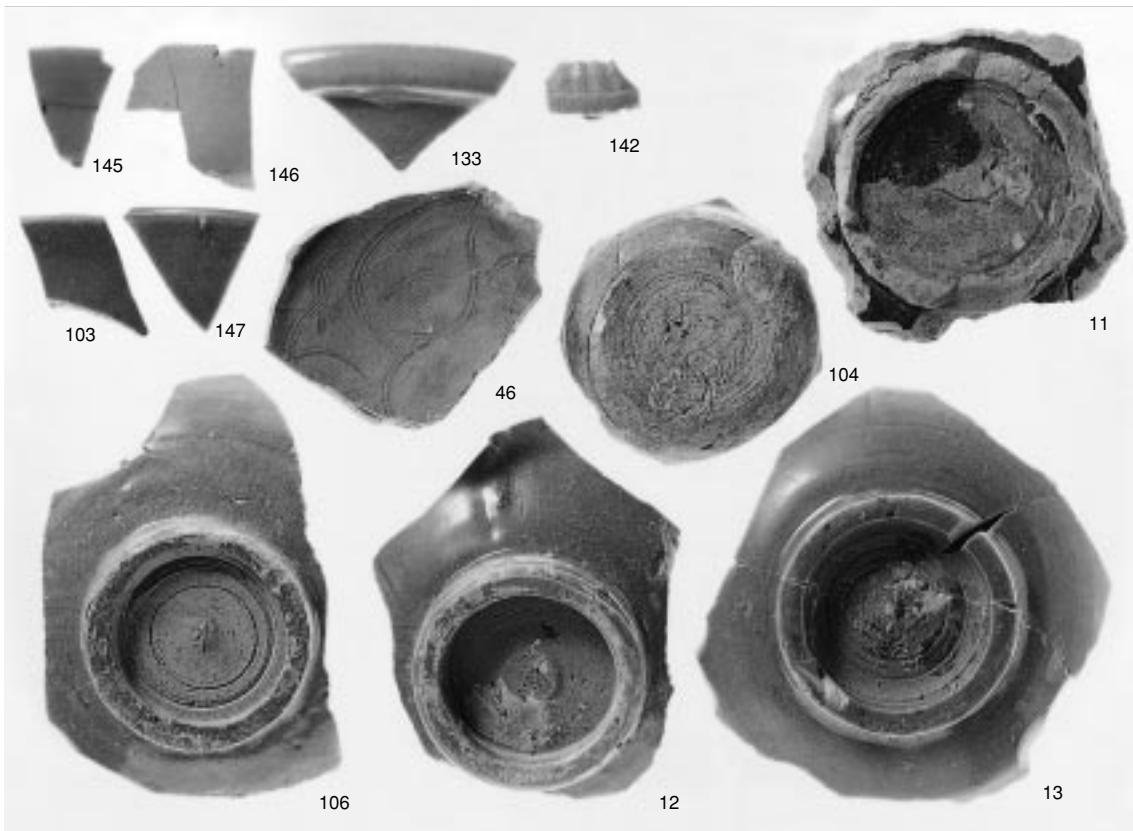


123

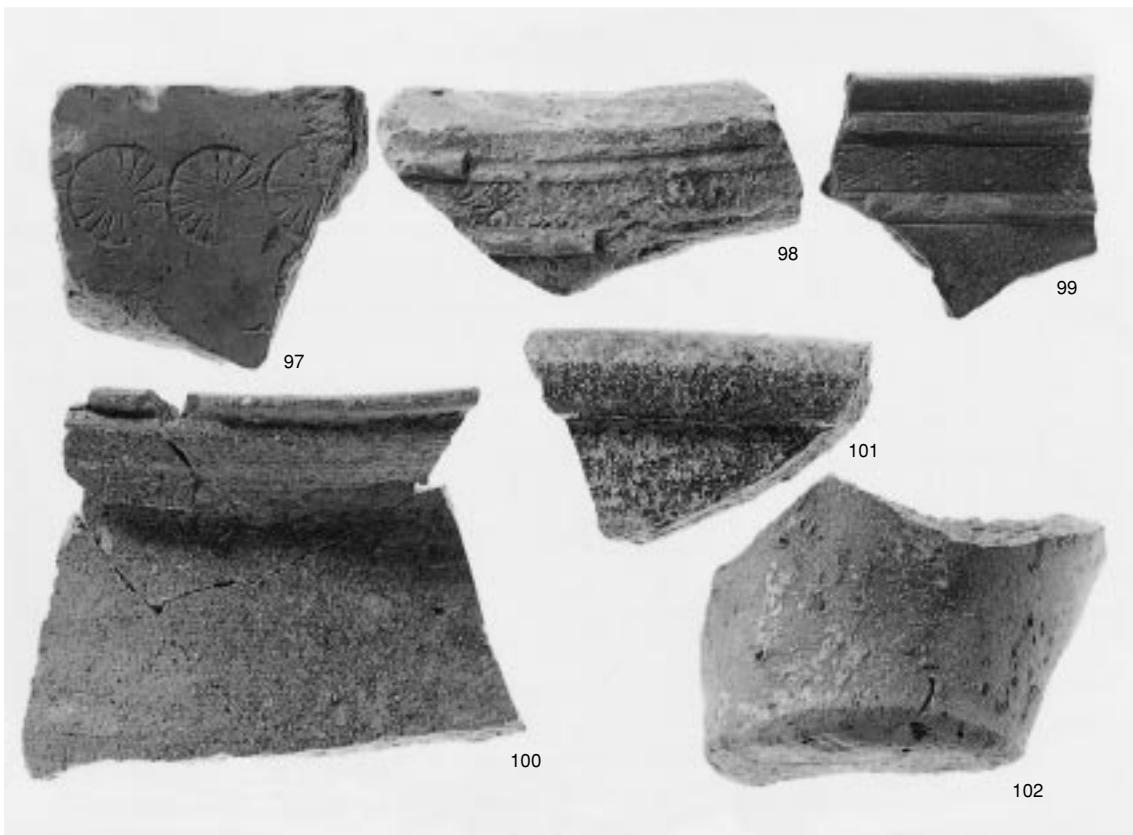
(3) 土坑S X25出土陶磁器

長岡京跡右京第705次調査

図版
二



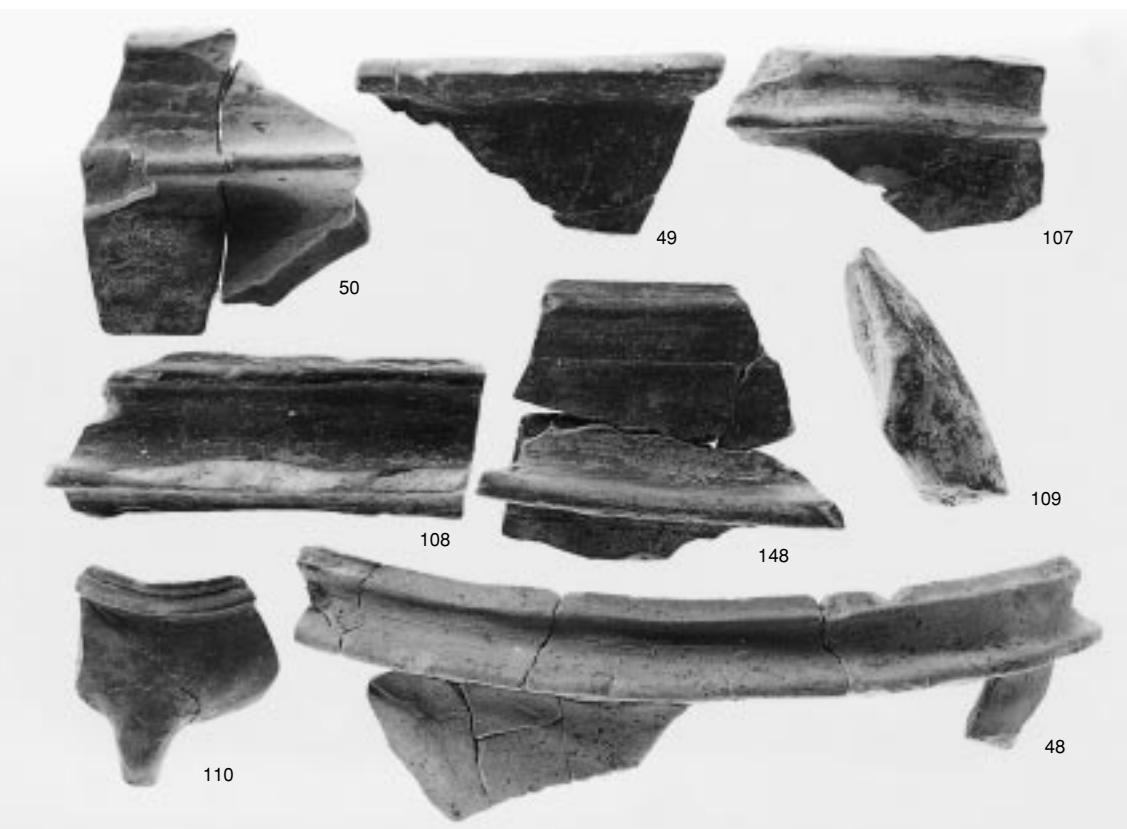
(1) 白磁・青磁・緑釉陶器等



(2) 井戸S E 45出土鉢・壺類

長岡京跡右京第705次調査

図版
一
三



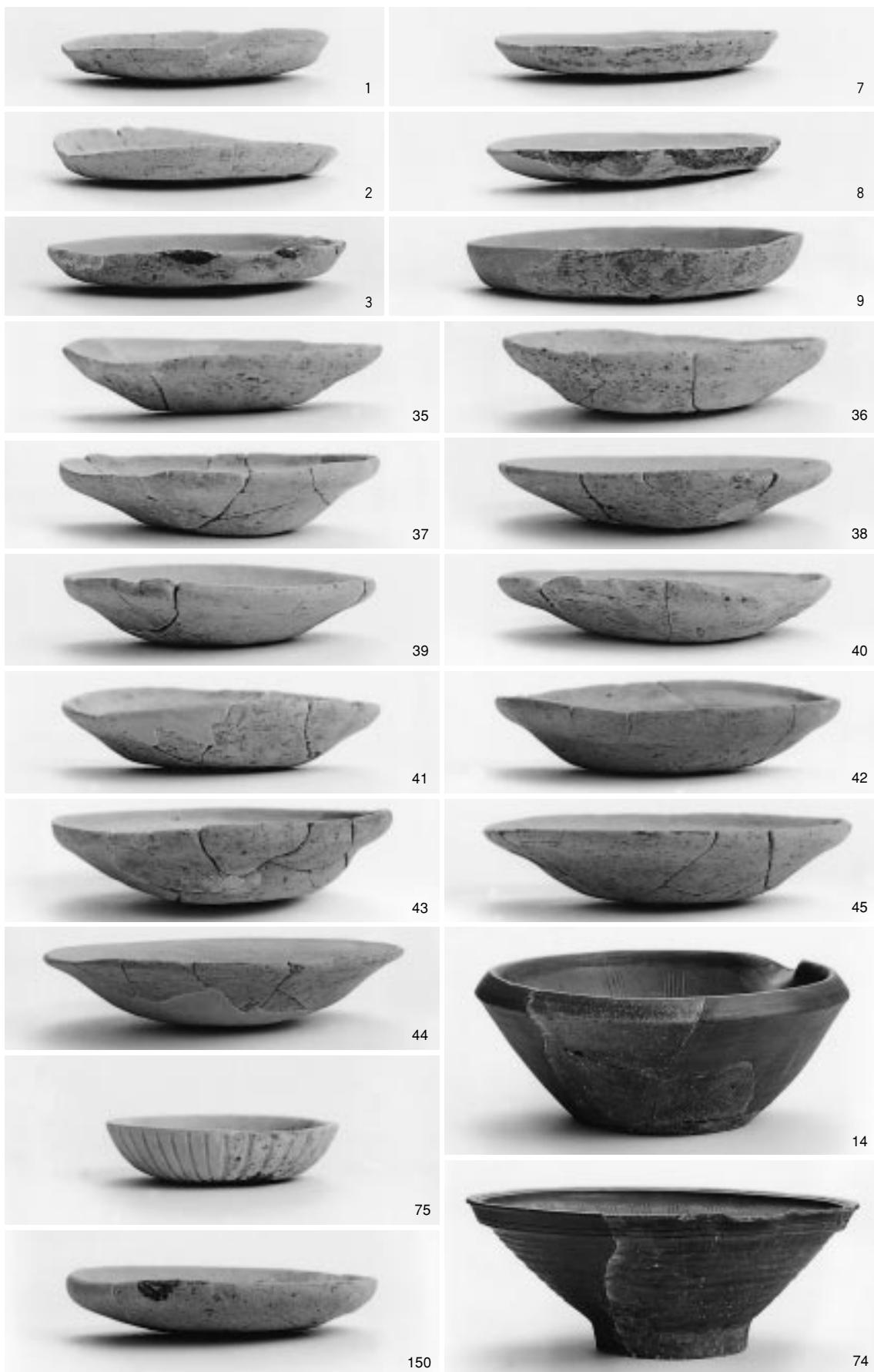
(1) 鍋・羽釜類



(2) 青磁碗、天目茶碗、瓦器碗

長岡京跡右京第705次調査

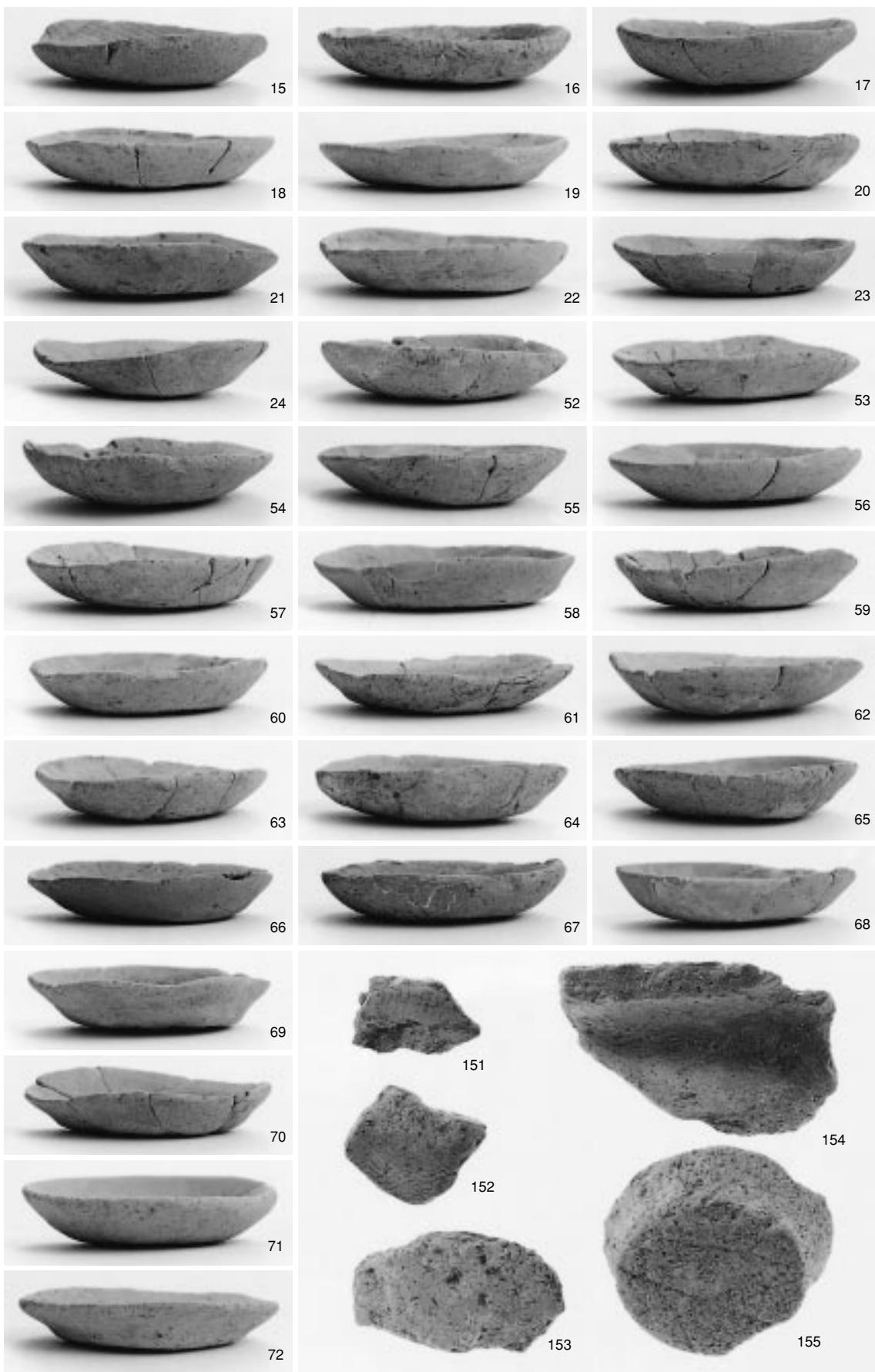
図版
一
四



土師器皿・擂鉢他

長岡京跡右京第705次調査

図版
一五



土師器皿・弥生土器

長岡京跡右京第724次調査

図版一六



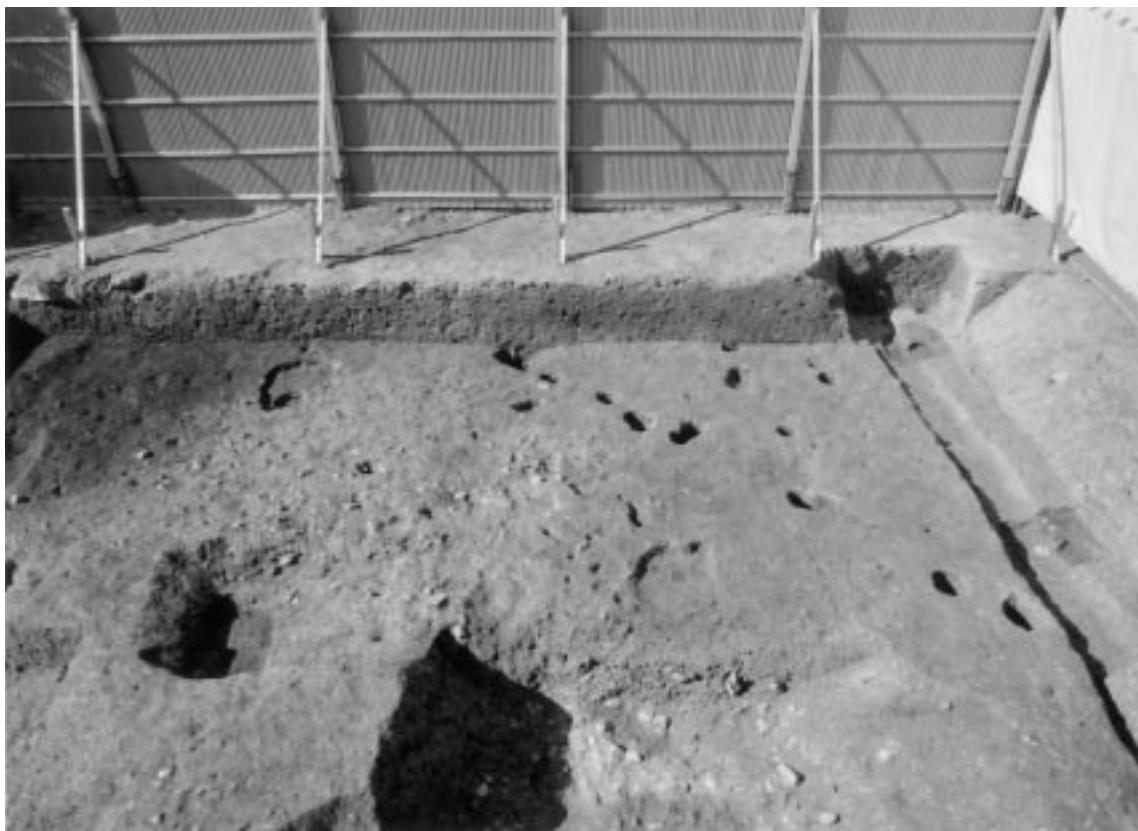
(1) 北調査区全景 (南から)



(2) 南調査区全景 (北から)

長岡京跡右京第724次調査

図版
一七



(1) 掘立柱建物 S B 02 (東から)



(2) 方形周溝墓 S X 03 (南西から)

長岡京跡右京第724次調査

図版一八



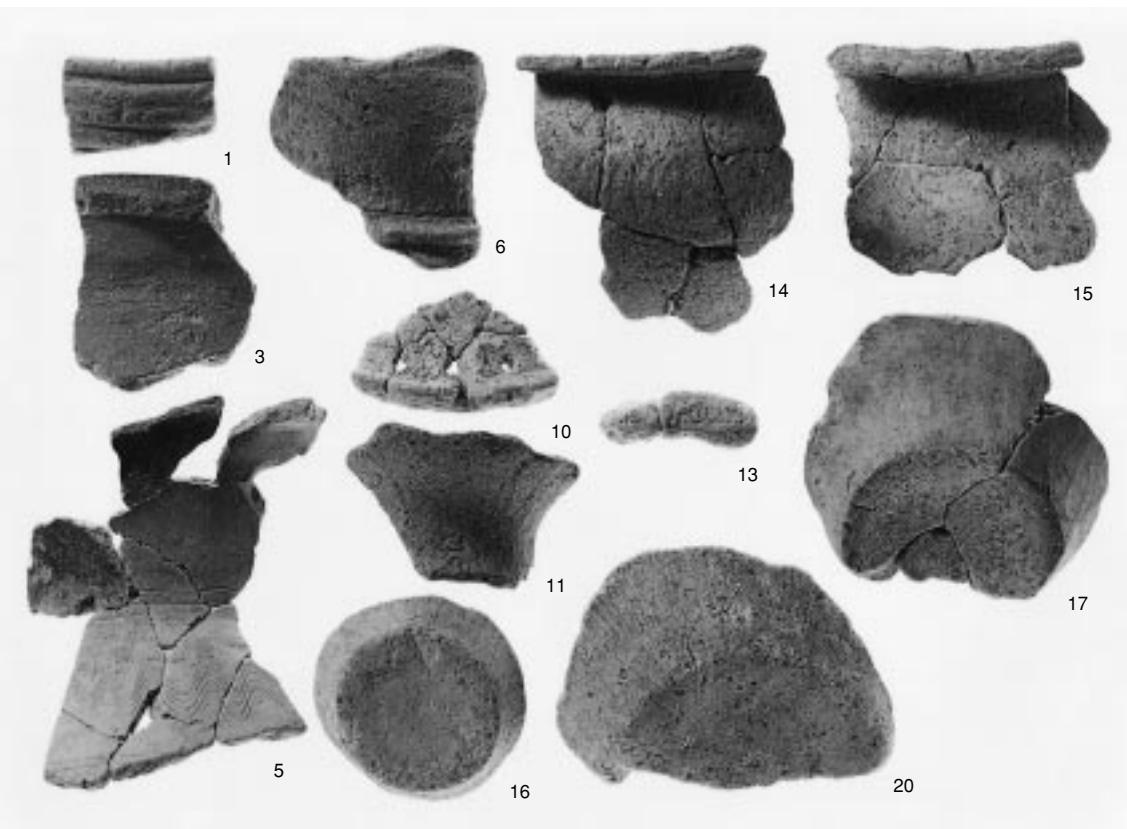
(1) 方形周溝墓 S X03 (西から)



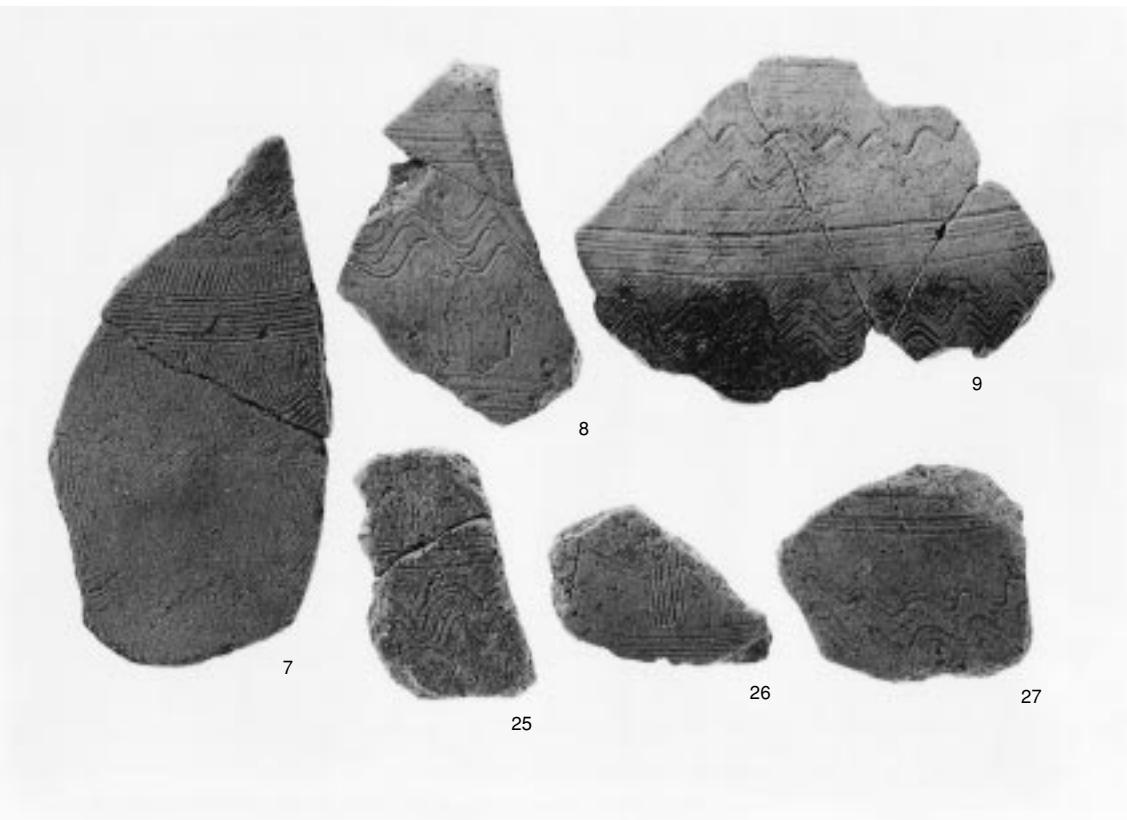
(2) 方形周溝墓 S X04 (北東から)

長岡京跡右京第724次調査

図版
一九



(1) 出土遺物 - 1



(2) 出土遺物 - 2

長岡京跡右京第725次調査

図版二〇



(1) 南調査区長岡京期以降の状況（北から）



(2) 南調査区完掘状況（北西から）

長岡京跡右京第725次調査

図版二



(1) 北調査区長岡京期以降の状況（南から）



(2) 北調査区完掘状況（北から）

長岡京跡右京第725次調査

図版二三



(1) 柵 S A 06 (北西から)



(2) 掘立柱建物 S B 09 (西から)



(3) 掘立柱建物 S B 09 (北西から)



(4) 掘立柱建物 S B 09 (東から)



(5) 溝 S D 04 (北から)



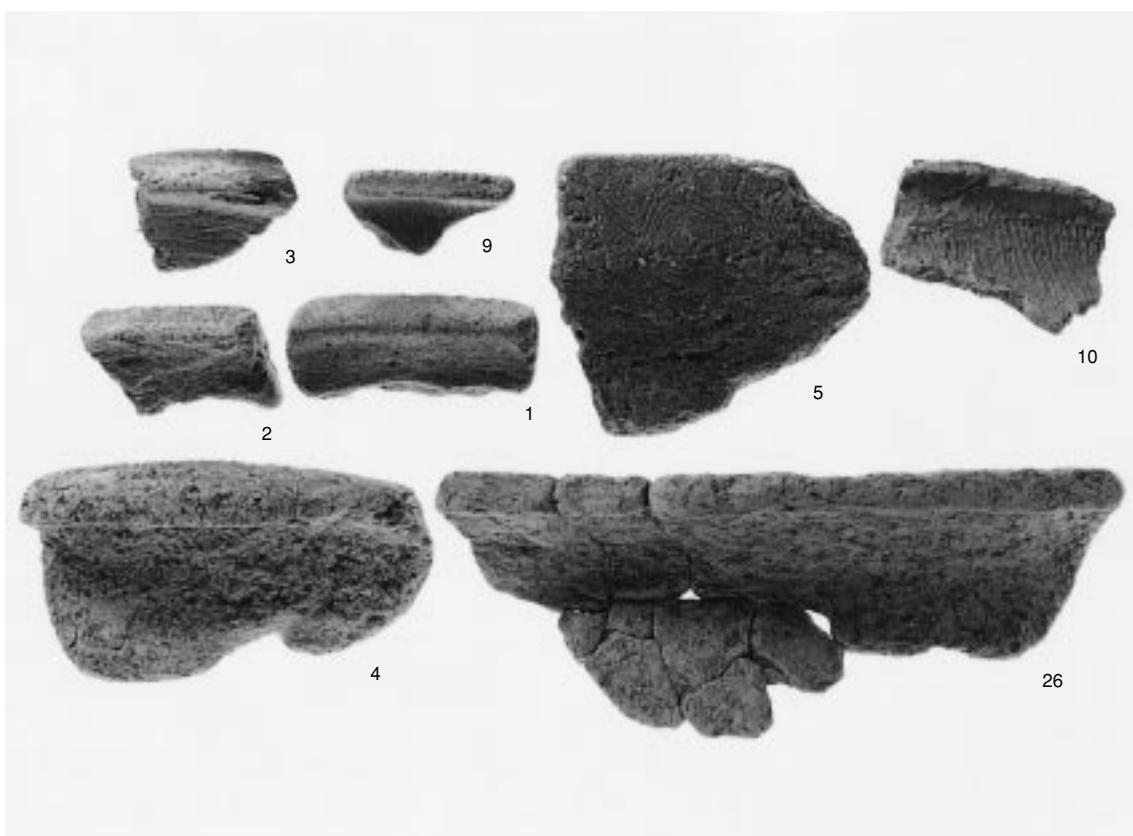
(6) 調査地周辺の状況 (東から)

長岡京跡右京第725次調査

図版二三



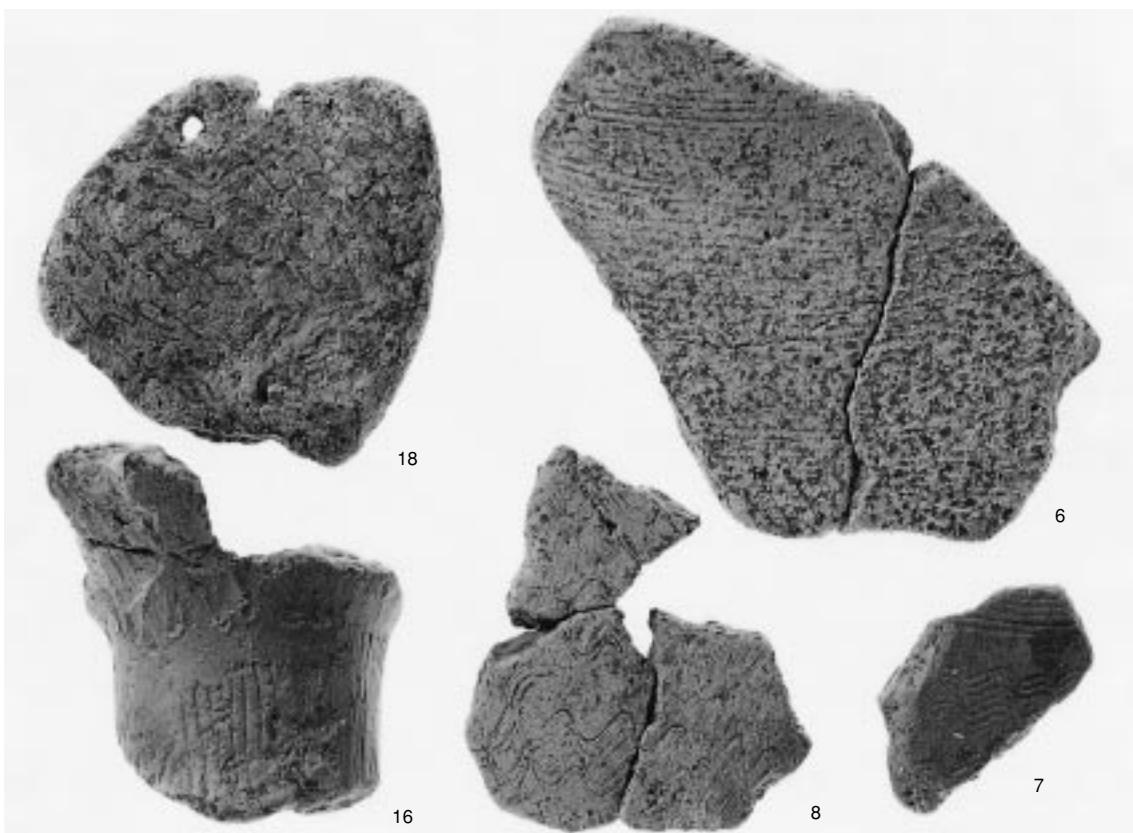
(1) 長岡京期以降の遺物



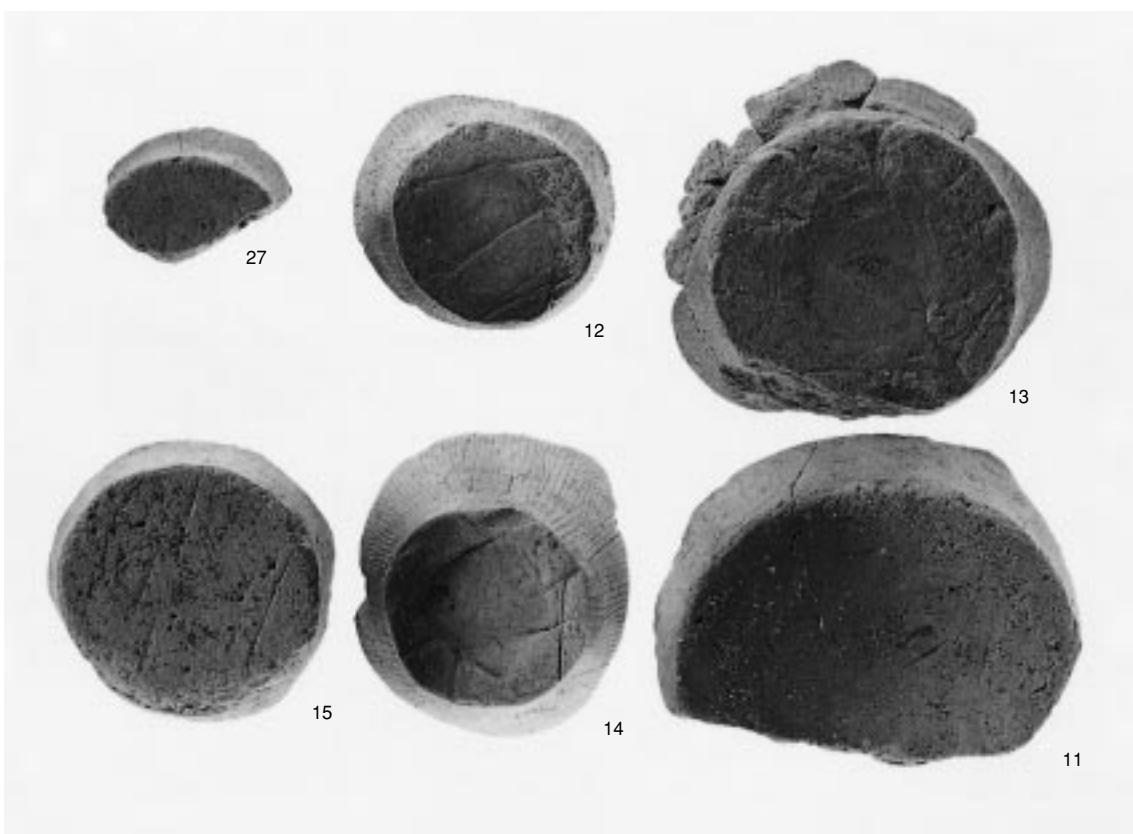
(2) 弥生土器壺・甕口縁部

長岡京跡右京第725次調査

図版二四



(1) 弥生土器壺・甕体部、高杯



(2) 弥生土器壺・甕底部